

平成24、25年度 調査研究報告書(2年次報告)

特別支援教育の視点を生かした 分かりやすい授業づくり



目 次

I	研究主題	1
II	主題設定の理由	1
1	本研究の理念	1
2	研究の経過から	1
3	研究主題（2年次）の設定	2
III	研究の目的（2年次）	2
IV	研究の経過（1年次の研究の要点整理）	2
1	「分かりやすい授業」の定義	2
2	「分かりやすい授業の要件」について	2
V	研究の方法（2年次）	5
1	研究の方法	5
2	研究の対象	5
VI	研究の計画（2年次）	6
VII	研究の実際	7
1	現状把握	7
2	「要件」を取り入れた授業計画の作成	9
3	実践・整理	20
VIII	研究の成果と今後の課題	36
1	研究（2年次）の成果	36
2	今後の課題	36
	引用・参考文献	38
	資料	39
	おわりに	51

I 研究主題

特別支援教育の視点を生かした分かりやすい授業づくり

II 主題設定の理由

1 本研究の理念

児童生徒に「分かりやすい授業」を行うことは、全ての教師にとっての願いであり、その実現に向けて、教師は日々努力を重ねているといっても過言ではありません。

昨今、この「分かりやすい授業」に出会う機会が増えたことを実感しています。例えば、ある小学校の「分かりやすい授業」では、授業のねらいや学習内容、授業構成や教材の活用等についての十分な吟味がなされ、多くの児童が、授業のねらいの達成に向けて意欲的に取り組んでいました。また、支援が必要な児童が学習に取り組む様子から、「先生のその説明、よく分かった!」「その方法ならできそう!」という実感が持てる実践であることが伝わってきました。このように、これまで出会った「分かりやすい授業」の多くは、教科指導のノウハウや知見が十分に生かされているとともに、支援が必要な児童生徒の能力が十分に発揮できるような手立てが練られていたように思います。

さて、この「分かりやすい授業」ですが、よく観察してみると、支援が必要な児童に対して、何か特別な配慮をしているという様子は見受けられませんでした。むしろ、実態の入念な把握や緻密な教材研究等により、支援が必要な児童を含む全ての児童に分かりやすい手立てや工夫等が計画・実践されていたように思います。これは、教科の特性を踏まえた教材研究を行ってさえいけば、支援を必要とする児童にも対応できるということの意味しているのではなく、通常の学級で行われている「分かりやすい授業」の手立ての中に、特別支援教育の視点が包含されているということであり、この事実により多くの教師がもっと注目すべきであることを示唆しているように思います。このことから、今後は「分かりやすい授業」を実現させるためには、特別支援教育の視点が欠かせないということを多くの教師が意識し、特別支援教育の視点を意図的・計画的に取り入れた授業づくり、すなわち、教科指導の知見と特別支援教育の視点を融合させた「分かりやすい授業」づくりを一層進めていくことが必要と思われる。

一方、全国的に児童生徒の学力向上が喫緊の課題とされている中、その解決の糸口の一つとしても「分かりやすい授業」が注目され、その研究・開発が数多く進められています。その研究の多くは、教科指導の知見と特別支援教育の視点を融合させた「分かりやすい授業」の在り方をスタンダードとして考えているようですが、本研究も、特別支援教育の視点が学力向上と切り離せない重要な視点であること、さらには、「分かりやすい授業」の実現のためには、当然のごとく取り入れられなければならない視点であることとして捉えました。

以上のことから、本研究は、前述した学校現場が抱える課題やニーズ及び全国的な動向や今日的課題を踏まえ、これまで特別支援教育が培ってきた指導・支援のノウハウを、小中学校等における通常の学級の授業に積極的に取り入れること、そのために、教科指導の知見の中にある特別支援教育の視点を明らかにした上で、その両者を兼ね備えた授業の手立てや工夫等を整理することを重点課題としました。

2 研究の経過から

本研究は、平成24年度からの継続研究で、2年次の研究に当たります。1年次の研究は、「分かりやすい授業の要件」(以下、「要件」と記す)を整理することをゴールとし、当教育センターの所員が県内の中学校で実施した授業を分析材料とし、その分析を通して、指導の手立てや工夫等の中に含まれる特別支援教育の視点について明らかにしました。

1年次の主な成果としては、次の二点が挙げられます。一点目は、「分かりやすい授業」づくりには、教科指導と特別支援教育との融合が大切であることが改めて示唆されたということです。二点目は「要件」についての一定の整理ができたことです(『「分かりやすい授業」の要件』: p. 3、4参照)。

一方、課題ですが、「要件」が十分に吟味されておらず、必要十分な「要件」としてとらえるには検討の余地があるという点です。柘植(2011)氏は『「分かりやすい授業」の研究の成果として提案されていることの

多くが実証性や根拠に乏しく、何が有効で、何が限界であるのか、さらには、全ての児童生徒にも有効であるという問いに明確な回答をしているものは少ない』と指摘していますが、まさに本研究においてもその点が課題であると考えます。

3 研究主題（2年次）の設定

そこで、研究の2年次においては、「要件」を意図的に取り入れた授業を実践し、その授業分析をもとに「要件」の効果を確認することや、「要件」を取り入れる際のポイントを明らかにすることに取り組むこととしました。

具体的には、全ての「要件」が本当に効果があるものか、特定の教科にのみ効果があるものか、複数の教科あるいは全教科に共通して効果があるものか、「要件」として不足しているものがないか等について、実践を通して分析、考察をすることとしました。

III 研究の目的（2年次）

本調査研究は、特別支援教育の視点を生かした「分かりやすい授業」づくりの実践を通して、その効果の確認及びその「要件」を取り入れる際の留意点について整理し、提言・発信することを目的とします。

IV 研究の経過（1年次の研究の要点整理）

1 「分かりやすい授業」の定義

前述したとおり、「分かりやすい授業」の多くは、教科の特性等を踏まえ、十分な教材研究に裏打ちされた優れた授業であるとともに、支援が必要な児童生徒にも配慮された工夫、すなわち、特別支援教育の視点を含むものであると考えます。言い換えるならば、教科教育と特別支援教育の双方が培ってきた指導・支援のノウハウを互いに生かし合う中で、「分かりやすい授業」が実現されていくものと考えました。

以上のことから、本研究における「分かりやすい授業」については、次のように定義しました。

「分かりやすい授業」の定義

通常の学級で大切にされてきた各教科の目標や内容を習得しやすくするための手立てと、児童生徒のつまりきの背景にある認知様式や障害特性等を踏まえた視点、すなわち、特別支援教育の視点が一体化された「要件」を含む授業のこと

2 「分かりやすい授業の要件」について

「分かりやすい授業」の定義にも示したように、「分かりやすい授業」には、教科指導の知見と特別支援教育の視点が兼ね備えられているとともに、その両者の良さが一体化された「要件」が含まれていると考えました。

そこで、本研究の1年次は、当教育センターの所員が行った授業のVTR視聴を基に授業分析を行い、「要件」を明らかにすることに取り組みました。

表1は、その「要件」を整理したものです。

表1 「分かりやすい授業の要件」

各教科に特徴的な「分かりやすい授業の要件」

国語科	国-① 抽象的な言葉や表現について、身近な事象や具体物等を示しながらイメージを持たせる。
	国-② 教師のモデルや友達の意見に触れさせながら、新たなものの見方・考え方・捉え方を経験させる。
	国-③ 文章の構造や構成要素に着目させ、(児童)生徒自身が表現するときのヒントや工夫につなげる。
社会科	社-① 写真やグラフ、地図等の情報を関連付けて、事象に関する時代背景や要因、事象が及ぼした影響等のイメージを持たせる。
	社-② 事象を項目に沿って表にまとめて比較することで、本時のねらいや注目すべきポイントに気付かせる。
数学科	数-① 数学に関する用語や公式、図形やグラフ等の意味や性質について、視覚的な情報や具体的な操作によってイメージを持たせる。
	数-② 計算の過程全体を可視化し、見通しを持って計算が実行できるようにする。
理科	理-① 演示実験に注目しやすい工夫や環境設定を行うことで、実験の目的やねらいを明確にするとともに、手順や方法等を確認させる。
	理-② 実験の目的を明示したり、結果を予想させたりすることで、実験に対する意欲や目的意識を持たせる。
	理-③ 条件を抑制した実験の際、「変える条件」と「変えない条件」を明確にし、実験の目的やねらいを焦点化する。
外国語科 (英語)	英-① 単語を「音(読み)→形(文字)→意味」を関連させながら単語を発音したり書いたりさせる。
	英-② 表情やボディークションを付けることで、スピーチの内容を推測させたり、内容を理解する上でのヒントにさせる。
	英-③ 英文を繰り返し聞いたり、生徒自身が話したりすることで、音の違いや語と語の連結に伴う音の変化に気付かせる。
	英-④ 「読む」「書く」「聞く」「話す」などの一つ一つの活動に集中できるような授業構成を行う。

全教科に共通する「分かりやすい授業の要件」

☆1 目標、ねらい 学習の評価	☆1-① 毎時間行うドリル学習や課題テストで、自分なりの目標を持たせる。
	☆1-② 間違った回答に対しても、発表したこと自体を認めることで次の学習への意欲につなげる。
	☆1-③ 発表後、発表者の表現で良かった点や改善点を伝える。
	☆1-④ 机間指導の際に評価できる点を見つける。よい発言や態度などをさりげなくすぐ褒める。
	☆1-⑤ 適切な行動は即時に評価する。
	☆1-⑥ 適切な行動は全員の前で賞賛し、何が良かったかを伝える。
	☆1-⑦ どんな小さなことでも良かったことは学級全体へ返す。
	☆1-⑧ 自己評価表による本時の振り返りを行い、次時への意欲を喚起する。
☆2 学習の準備	☆2-① 授業の始めに、机上に必要なものだけが出ているかを確認する。
	☆2-② 具体物一つずつ見せながら、同じものを準備させる。
	☆2-③ 机上の整理をさせてから、必要なものを準備させる。
☆3 授業の構成	☆3-① 導入時に注意を引き付けるような視覚的な提示やゲームなどをする。
	☆3-② 授業の始めに、予習で分からなかったことを把握する。また、授業の最後には理解できたか確認する。
	☆3-③ 授業の始めに、学習内容(ねらい)について伝え、板書する。
	☆3-④ 今日の課題や作業の進め方を板書で示す。
	☆3-⑤ 授業の中に様々な活動を取り入れる。
	☆3-⑥ 授業の基本的な流れを定め、学習の展開を分かりやすくする。
	☆3-⑦ どこまで取り組むのか、「終わり」をしっかりと知らせる。
	☆3-⑧ あと何題、あと何分などゴールを伝える。
	☆3-⑨ 授業の途中で、何度か課題の達成状況を確認する。
	☆3-⑩ 課題設定を易しいものから難しいものへレベルアップさせ、学習意欲を高める。
	☆3-⑪ 発展的な課題を準備し、一人一人に応じてチャレンジさせる機会を設ける。
	☆3-⑫ 時間通りに授業を始め、終わらせる。

☆4 指示の出し方	☆4-① 作業や活動を止めさせてから指示を出すようにする。
	☆4-② 始めからワークシートは配らず、板書や教師の説明に集中させる。
	☆4-③ 指示は肯定的な表現で行う。
	☆4-④ 全体指示の後、丁寧に机間支援をして理解の程度や取組の状況を把握する。
	☆4-⑤ ジェスチャーをつけながら指示を出す。
	☆4-⑥ 言葉の指示だけでなく視覚的な手掛かりも与える。
	☆4-⑦ 実際にやって見せて説明する。
	☆4-⑧ 授業のまとめでは、ワークシートを使って整理する。
	☆4-⑨ 指示の語調、声の大きさ、トーン等を工夫しながら話す。
☆5 教材教具	☆5-① 見て(視覚) → 読んで(聴覚) → 書く(動作)等の様々な感覚を用いて情報を理解させる。
	☆5-② 多様なレベル・パターンの課題を準備し、(児童)生徒自身が進捗に合わせて取り組めるようにする。
	☆5-③ プレゼンテーションソフトで作った教材やICT等の視聴覚機器を利用する。
☆6 板書の工夫 ノート指導	☆6-① ワークシートと対応させた板書を行う。
	☆6-② 文字の大きさに配慮し、後ろからでも見やすい大きさと板書する。
	☆6-③ 文字カードは重要なキーワードにのみ使用する。
	☆6-④ 教科書のページを板書する。
	☆6-⑤ ワークシートを拡大した用紙を黒板に貼って説明する。
	☆6-⑥ 注目してほしいキーワードや重要語句を強調する。(文字の大きさ、色、アンダーライン等)
	☆6-⑦ 授業の流れが分かるように構造化された板書をする。
☆7 学習環境	☆7-① 学習のヒントや既習事項を、補助黒板やワークシートなど様々なところに示す。
	☆7-② ワークシートに記述した内容を発表する際、ワークシートを拡大し投影する。
☆8 学習形態 (ペア、グループ)	☆8-① 発表をペアでさせるように配慮し、教え合えるような場面を工夫する。
	☆8-② 全体に発表する前に、ペアで練習する機会を設けて、自信や意欲を持たせる。
	☆8-③ 「個人ワーク → 一斉 → グループワーク → 個人ワーク …」というように、学習形態を組み合わせる。
	☆8-④ 自力解決した結果をペアで確認させたり、友達へのアドバイスを伝えさせたりして、(児童)生徒自身の取組や活動を振り返らせる。

V 研究の方法（2年次）

1 研究の方法

研究の2年次は、研究の1年次に明らかにした「要件」を取り入れた授業の実践と、その授業の分析・考察を通して、「要件」を取り入れた授業の効果を明らかにすることとしました。

2 研究の対象

(1) 校種及び教科の選定とその理由

研究対象の校種は中学校、教科は外国語（英語）としました。理由は、以下の三点です。

- 本研究は平成24年度からの継続研究であり、1年次の研究対象校種が中学校であったこと。
- 本県の重点施策や学力調査の結果から、英語の学力向上は喫緊の課題であること。
- 当教育センターに依頼される教育相談のケースで、特に英語につまずきのある生徒が多いという現状があること。

(2) 学年の設定とその理由

研究対象の学年は第1学年としました。理由は、以下の三点です。

① 外国語活動との関連の重要性

「中学校学習指導要領第2章第9節第3 指導計画の作成と内容の取扱い」には「小学校における外国語活動との関連に留意して、指導計画を適切に作成するものとする。」と明記されました。このことから、小学校の外国語活動で、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませること」を中心とした学習活動を通して養われた「コミュニケーション能力の素地」を、第1学年の段階から継承し発展させていくことが重要だと考えました。

② 新たな内容への早期対応の重要性

小学校段階での「コミュニケーション能力の素地」とは、言語や文化に対する体験的な理解、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむことを指します。このような言語活動の特に音声面を中心とした「聞くこと」「話すこと」に関する内容に加え、中学校段階では、新たに「読むこと」「書くこと」に関する内容が明示され、四つの技能（「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」）を総合的に学習することになります。また、中学校段階での目標に示されている「コミュニケーション能力の基礎」とは、文法規則と語彙を理解した上で、実践のコミュニケーションに外国語を運用することができる能力の基礎という捉えとなり、このことは小学校の段階の学習に文法規則や語彙の学習が新たに加わることを意味しています。このような新たな内容の学習に第1学年時から切り替える必要があるため、第1学年の段階から早期に対応することが重要だと考えました。

③ 外国語科特有のつまずきに対する早期対応の重要性

日本語を母国語とする中学生が、外国語を学習する際には次のような認知面のつまずきが推測されます。

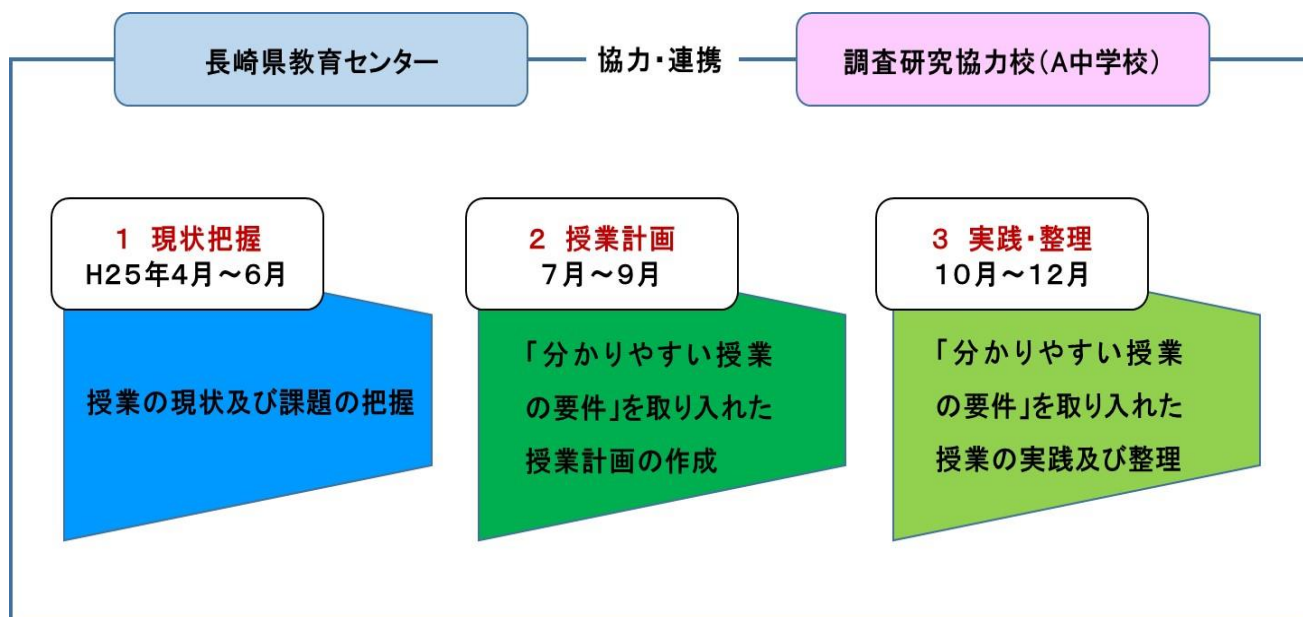
- 「音韻認識のつまずき」
- 「文字の識別のつまずき」
- 「単語をまとまりとして捉えるつまずき」
- 「音や文字と意味を関連付けて理解することのつまずき」
- 「既習事項を記憶することのつまずき」
- 「既習事項と新出事項を関連付けて理解することのつまずき」 等

これらの状況を踏まえると、第1学年の段階から、早期対応をしていくことが重要であると考えました。

VI 研究の計画（2年次）

調査研究協力校（以下、「研究協力校」と記す）として大村市内のA中学校に協力を依頼し、A中学校と連携し、**図1**に示す計画に沿って「要件」を取り入れた授業の効果について明らかにしていきました。

図1 研究の計画（2年次）



Ⅶ 研究の実際

1 現状把握

(1) 授業の現状及び課題の把握

① 目的

研究協力校において実施した調査研究協力員（以下、「研究協力員」と記す）の英語の授業について、教科指導の知見と特別支援教育の視点で分析することにより、研究協力員への授業改善案をまとめることになりました。

② 授業分析の方法

下の写真に示すような流れで、研究協力校で実施した研究協力員の英語の授業ビデオを視聴しながら、気付き等の意見を付箋紙（赤：教科指導の知見、黄色：特別支援教育の視点）に書き分けていくワークショップ形式で授業分析を行いました。協議は、英語担当の所員と特別支援教育研修課の所員とが協働して行いました。



授業ビデオ視聴



気付きを付箋紙に記入



英語担当の所員の発表



授業改善案の整理 2



授業改善案の整理 1

③ 6月の授業分析における研究協力員の授業（英語）の整理

研究協力員による授業を教科指導の知見と特別支援教育の視点で分析した結果、次の a～e に示すとおり、研究協力員の授業の良さと課題を整理しました。（☆：良さ ■：課題）

a 単元全体のねらいと本時のねらいについて

- 生徒にこれからの学習内容に対する見通しを持たせるために、単元全体の目標や本時の目標を生徒に分かりやすく伝える。

b 導入の「英語の歌」について

- ☆ 英語の歌を学級全体で歌う活動は、英語が苦手な生徒にも親しみやすい。
- ☆ 語と語の連結による音変化（つながって聞こえる音）にもなじみやすい。
- ☆ 授業の始めに「英語の歌」を歌う活動を取り入れ、授業の流れをパターン化することで、生徒は見

通しを持ちやすい。

c 授業の展開について

- ☆ 注意や集中を持続することが困難な生徒のためにも、授業の流れをパターン化していることが良い。
- ☆ 授業中の形成的評価、例えば、机間支援で、生徒のできている点について、「good」と肯定的に評価することは、生徒の自己肯定感を高めたり、学習意欲を高めたりする。
- ☆ 自己評価カードを活用して、良かった点を即時評価（「two points」とポイントを与える）する取組は生徒の学習意欲を高めている。
- 授業の大まかな流れを視覚的に示す。

d 板書

- 板書したものをノートに写す時間を確保する。
- 板書を構造化（整理）して、ノートにまとめやすくする。

e 発音指導

- ☆ ALTの発音を何度も繰り返し聞かせることで、似ている「音」の違い等に気付きやすい。
- ALTの「発音」「口形」「文字」など、どこに生徒が着目すればよいのかを焦点化した方が生徒の混乱は少なくなる。

④ 「要件」の選択と提案

「③ 6月の授業分析における研究協力員の授業（英語）の整理」を通して、研究協力員の今後の授業について、次の三点を授業改善案として提案しました。

- 授業の始めに英語の歌を毎回歌うことで、生徒が見通しを持ちやすくなったり、英語の学習への楽しい雰囲気作りにつながったりしている。英語の歌を生徒が歌うことは、聞いて発音することに慣れさせることにもなる。今後も継続してはどうか。
- 板書を写すことが苦手な生徒、どこを説明されているのか分からなくなる生徒への配慮として、生徒に配付する補助プリントを拡大したものを黒板に貼って説明してはどうか。
- 本時の大まかな流れを授業の始めに板書して生徒に伝えるようにしてはどうか。

2 「要件」を取り入れた授業計画の作成

(1) 研究の対象となる単元について

本研究の目的に迫るために、第1学年の単元『PROGRAM6「由紀のイギリス旅行」(SUNSHINE ENGLISH COURSE 1 開隆堂出版)』を研究の対象として設定しました。本単元の特徴を以下の①～③に示します。

① 三人称の概念をイメージすることが必要

英語圏では、自分とコミュニケーションの直接の相手以外を総称して三人称(「he」「she」等)で表現するため、話題にしようとする人物(主語)に応じて適切な三人称をイメージすることが必要になります。

② 既習の一般動詞が定着していることが必要

本単元で学習する三人称単数の現在形(以下「三単現」)の肯定文、疑問文、否定文は、主語の変化や文の種類に応じて、一般動詞の語形を変化させることが必要です。したがって、本単元の学習に際しては、既習の一般動詞について、その読みや綴り、意味等の理解が必要になります。

③ 多様な文法規則を理解することが必要

本単元の学習では、三人称単数を主語とする場合、肯定文の一般動詞の-sの付け方が多様であったり、疑問文と否定文の一般動詞に語形の変化(-sが付かない・原形)がなかったりするなどの、多様な文法規則を理解することが必要になります。

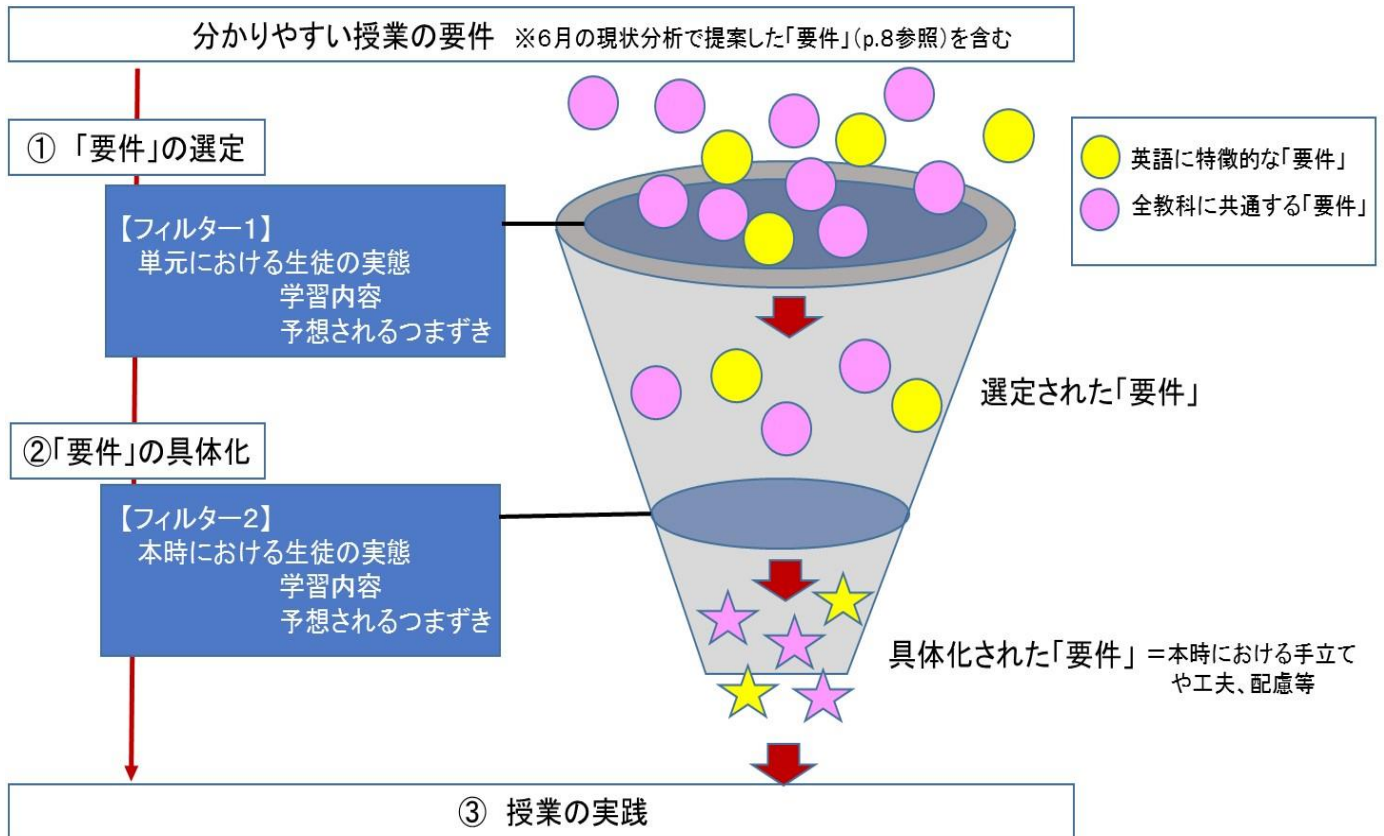
このような特徴がある本単元において、「要件」を意図的に取り入れた授業実践を行い、その効果や妥当性を確認することにしました。

(2) 「要件」を取り入れた授業づくり

① 手順

「要件」を取り入れた授業づくりを、**図2**に示すような手順を進めることとしました。まず『①「要件」の選定』では、研究(1年次)で明らかにした全ての「要件」(p.3、4参照)に対して、単元における「生徒の実態」「学習内容」「予想される生徒のつまずき」という3つの視点を含む【フィルター1】を通して、必要と思われる要件を選定しました。さらに、『②「要件」の具体化』において、選定された「要件」を、本時レベルにおける【フィルター2】を通して、実際に指導をする上での手立てや工夫、配慮等として具体化し、授業を実践しました。

図2 「要件」を取り入れた授業づくりのイメージ

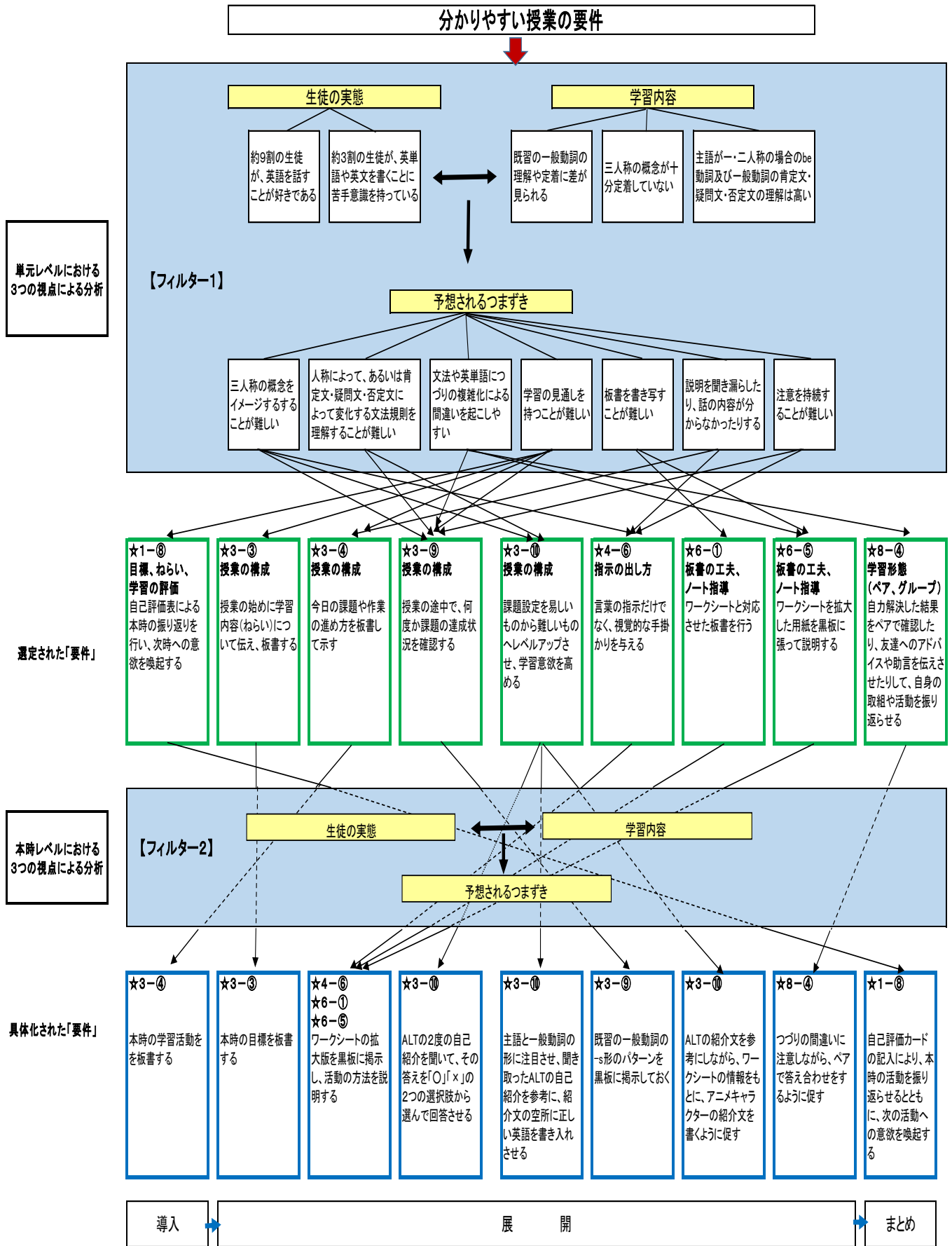


② 本単元における「要件」の選定及び具体化

本単元において、前述の手順で選定及び具体化された「要件」を図3に示します。「要件」を選定する際は、本単元における「生徒の実態」「学習内容」「予想されるつまずき」という3つの視点を含む【フィルター1】を通して明らかになった生徒の状況を踏まえて、効果的な指導を行うために必要な「要件」を選定することにしました（図3の中の緑囲み）。さらに、選定された「要件」は、【フィルター2】（本時レベルにおける「生徒の実態」「学習内容」「予想される生徒のつまずき」の3つの視点）を通して、本時の指導において必要な手立てや工夫として具体化しました（図3の中の青囲み）。

なお、具体化された「要件」は、研究協力員が実施した研究授業の学習指導案「5（2）展開」の「指導上の留意点」の中に、例えば「本時の学習活動を板書する（☆3-④）」という形で記載することで、「要件」を取り入れた指導を行うことを明確に示して、実際の授業につなげました（p.15、16参照）。

図3 本単元における「要件」の選定及び具体化



【学習指導案】

英語科 学習指導案

日時：平成25年10月31日（木） 4校時

対象：大村市立A中学校 第1学年●組

（男子16名 女子15名 計31名）

指導者：教諭 ●● ●●

ALT ●● ●●

- 1 単元名 PROGRAM 6 「由紀のイギリス旅行」
(SUNSHINE ENGLISH COURSE 1 開隆堂出版)

2 単元について

(1) 生徒観

生徒たちは、これまでに一・二・三人称+be 動詞現在形の用法や一・二人称の主語+一般動詞の肯定文・疑問文・否定文、疑問詞 What や数を尋ねる How many ~?の表現を学習してきた。また、前単元では、自己紹介の原稿作成及びスピーチを行ったり、主格の人称代名詞 he / she について学習したりした。中学校に入学して半年が過ぎた今、生徒に英語の学習に関する事前アンケートを行った。その結果が以下の通りである。

1. 外国の文化や習慣、歴史に興味があるか。	ある 8	どちらかといえば ある 17	どちらかといえば ない 4	ない 2
2. 英語を話すことは好きか。	好き 11	どちらかといえば 好き 16	どちらかといえば きらい 4	きらい 0
3. 英単語や英文を書くことは好きか。	好き 16	どちらかといえば 好き 5	どちらかといえば きらい 8	きらい 2
4. 英語の授業の活動で好きな活動は何か。(複数回答可)	多い順に 1. 歌(24) 2. フォニックス(12) 3. グループ単位で行う話す活動(9) 4. ノートにポイントをまとめる活動(8) 5. スピーチ(2)			
5. 英語の授業の活動で苦手な活動は何か?(複数回答可)	多い順に 1. 原稿を自分で作成して行うスピーチ(22) 2. 単語を覚える活動(11) 3. 英作文 (9) 4. 音読・発音練習(8) 5. ペアでする会話練習(8)			

質問1より、約8割の生徒が外国の文化や習慣、歴史に興味があり、質問2より約9割の生徒が、英語を話すことが好きであると回答している。その一方で質問3の英単語や英文を書くことは、好きが7割に留まり、3割は好きではないと回答している。

多くの生徒が歌やフォニックス、グループ活動など、話すことを中心とした活動が好きであると回答しているが、その一方で原稿を自分で作成して行うスピーチや単語を覚える練習など、英語を書くことが中心となる活動は苦手と回答しているところからも、多くの生徒に書くことに対する苦手意識があることが推測できる。また、先日行った一般動詞の確認テストにおいても、問題によって正答率がばらつき、二極化の傾向が見られた。

(2) 教材観

本単元では言語材料として、三人称単数現在形（以下、「三単現」と記す）の肯定文・疑問文・否定文を学習する。三単現の文法規則を習得することで、第三者について説明したり、紹介したりすることができ、表現の幅を広げることが期待できる。前単元で学習した一・二人称主語+一般動詞（現在形）と比較したり、関連付けたりしながら導入していくことで、三単現に対する理解を英作文を通して深めさ

せたい。

また、本文では主人公の由紀が英語の本場、イギリスに旅行する。2012年にはロンドンオリンピックも開催され、生徒の記憶にも新しい。また、アニメや漫画で有名な「名探偵コナン」が、「シャーロック・ホームズシリーズ」の作者、コナン・ドイルの名に由来することを、本単元を通して知ることができるなど、生徒にとっては、教材を身近に感じイメージをもちやすい内容である。英語学習に苦手意識がある生徒も、本文の内容に対して興味をもつことができ、延いては、英作文に対する意欲を高める一助となると期待できる。

(3) 指導観

ア 指導のねらい・工夫

本単元では次の予想される生徒の次のつまずきに配慮しながら指導を展開していく。

【予想される生徒のつまずき】

1. 日本語話者の生徒にとっては三人称の概念の理解が難しい。
2. 一般動詞は人称、あるいは肯定文・疑問文・否定文によって形が変わることの理解が難しい。
3. 文法や英単語の綴りの複雑化による間違いを起ししやすい。

そこで、人称の概念を理解させる際には、生徒にとって身近な人物のピクチャーカードや人称比較表等を用いて理解しやすくすることに努める。さらに単元の指導過程において適宜それらを提示し習得したことを振り返らせることとしたい。また、毎時間口頭による確認テストを行ったり、計画的に筆記による単語・文法テストを行ったりすることで、一般動詞の用法を正しく理解させ、運用させることとしたい。

イ 特別支援教育の視点

予想される生徒のつまずき	手立て	期待される効果
①三人称の概念をイメージすることが難しい。	○視覚情報の活用 ・身近な人物のピクチャーカードを、表にカテゴリー分けする。	・人称とそれに属する人物を表に示すことで、情報が整理され、人称とそれに対応する人物を関連付けやすくなる。
②一般動詞は人称によって、あるいは肯定文・疑問文・否定文によって形が変わることの理解が難しい。 ・主語が変わった時、一般動詞に-s形が付いたり付かなかったりするものの理解が難しい。 ・三単現の肯定文時の動詞の形が一般動詞によって違うものの理解が難しい。 ・否定文や疑問文では一般動詞に-s形が付かないものの理解が難しい。	○口頭による確認テスト ・人称の確認 ・動詞の用法 ○筆記による単語・文法テスト	・毎時間、前時までの学習内容を確認・整理することができる。 ・前時の学習内容と関連付けて本時の学習内容が把握しやすくなる。 ・計画的に行うことで、自分の間違いに気付いて修正しやすくなる。 ・自分の成長を確認することができ、意欲を高めたり自信につなげたりすることができる。 ※教師にとっては定着の様子を把握し、それに応じて今後の支援内容・方法を調整することができる。
③文法や英単語の綴りの複雑化による間違いを起ししやすい。	○一般動詞のリスト (Let's Check!) の提示 ・-sのパターン	・自分でリストを見ながら綴りの確認をすることができる。
④定着している一般動詞の数が少ない。	○一般動詞のリスト (Let's Check!) の提示 ・-sのパターン	・定着が十分でない生徒にとっては視覚的に提示することで想起しやすくなる。 ・単語の意味を確認することで、その意味を理解した上で活用することができる。

3 単元目標

- 第三者が主語になる場合の一般動詞の用法を正しく理解する。
- 第三者が主語になる場合の一般動詞の用法を正しく運用することができる。

4 単元指導計画（全7時間）

配時	学 習 活 動	評 価 規 準
1	三単現の肯定文の用法を理解し、定着を図る。	(表現) 人について正確に書くことができる。 (知識) 三単現の肯定文の用法を理解している。 <教科書>p.60 おぼえよう・使ってみよう p.79 動詞の-(e)s の形と発音・練習
2	三単現の疑問文の用法を理解し、定着を図る。	(表現) 人について正確に問答できる。 (知識) 三単現の疑問文の用法を理解している。 <教科書>p.62 おぼえよう・使ってみよう
3	三単現の否定文の用法を理解し、定着を図る。	(表現) 人について正確に書くことができる。 (知識) 三単現の否定文の用法を理解している。 <教科書>p.64 おぼえよう
4	対話文を読み、内容に関する質問に答える。	(意・関) わからない語句があっても、読み進めようとしている。 (理解) 大切な部分を読み取ることができる。 <教科書>p.61・p.63
5	対話文を聞き取り、内容に関する質問に答える。	(意・関) わからない語句があっても、必要な情報を聞き取ろうとしている。 (理解) 大切な部分を聞き取ることができる。 <教科書>p.65
6 (本時)	第三者について描写する。	(意・関) 三単現を使って相手に伝えようと意欲的に書いている。 (理解) 大切な部分を聞き取ることができる。 (表現) 正しい語句や表現を用いて、書くことができる。
7	第三者について質問する。	(意・関) 意欲的に質問したり、話そうとしたりしている。 (表現) 正しい語句や表現を用いて、話すことができる。 (表現) 正しい語句や表現を用いて、書くことができる。

5 本時の指導

(1) 目標

- 第三者の紹介文を意欲的に書くことができる。
- 三単現の肯定文及び否定文を正確に書くことができる。

(2) 展開

過程	学習活動	指導上の留意点
導入	<ul style="list-style-type: none"> ○あいさつをする。 ○今月の歌を歌う。 ○本時の学習活動を確かめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○日付・曜日・天気・時間の確認をする。日付・曜日については綴りを確認する。 ○特にスピードが速いところや、発音しにくいところを音読してから歌う。 ○本時の学習活動を板書する。 (☆3-④)
展開	<ul style="list-style-type: none"> ○本時の目標を設定する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;">ちびまる子ちゃんの紹介文を書こう。</div> <ul style="list-style-type: none"> ○ALTの短い自己紹介を聞く。 ○ALTの紹介文を書く。 <ul style="list-style-type: none"> ・一般動詞+-sのパターンの確認 ・三単現の否定文の確認 ○キャラクターの紹介を聞き、ワークシートに記入する。また紹介文を書く。 ○ペアで確認し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○本時の目標を板書する。 (☆3-③) ○ワークシートの拡大版を黒板に掲示し、活動の方法を説明する。 (☆4-⑥、☆6-①) ○ワークシートには三単現の-sのパターンが偏らないように、3種類の一般動詞を使った文を取り上げる。 ○ALTは、2度、自己紹介する。 ○その後2つの項目の正しい方に「○」をつけるよう指示する。 (☆3-⑩) ○主語と一般動詞の形に注目させ、聞き取ったALTの自己紹介を参考に、紹介文の空所に正しい英語を書き入れるように促す。 (☆3-⑩) ○既習の一般動詞の-sのパターンを黒板に掲示しておく。 (☆3-⑨) ○ALTの紹介文を参考にしながら、ワークシートの情報をもとに、アニメキャラクターの紹介文を書くように促す。 (☆3-⑩) ○綴りの間違いに注意しながら、ペアで答え合わせをするように促す。 (☆8-④)
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ○定着診断テストに取り組む。 ○本時を振り返る。 	<ul style="list-style-type: none"> ○三単現の肯定文・否定文を正確に書けるか確認する。 ○自己評価カードの記入により、本時の活動を振り返らせるとともに、次の活動への意欲を喚起する。 (☆1-⑧)

特別支援教育の視点	個別の教育的視点	評価規準〔評価方法〕
<p>○導入のルーティン化を図ることにより、安心して学習に入らせ、学習の構えをつくらせることができる。</p> <p>○学習活動を示すことで、見通しを持たせることができる。</p> <p>○視覚的に示すことで、学習活動を生徒自身に確認させることができる。</p>	<p>生徒 A:歌詞を見ながら、曲のスピードについていけないことが予想されるため、個別に歌詞を指差して知らせる。</p>	
<p>○目標を示すことで本時の学習到達内容を把握させることができる。</p> <p>○拡大して示すことで教師が意図するところに生徒の注意を向けさせやすい。</p> <p>○身近なALTのことを取り上げることで、興味を持たせることができる。</p> <p>○繰り返し聞かせることで、聞き漏らしを少なくしたり、音の聞き分けをしやすくしたりできる。</p> <p>○ポイントの語句のみを書かせることで、書くことが苦手な生徒の負担を減らしたり、考えるべき動詞の用法に注意を向けさせたりすることができる。</p> <p>○黒板やワークシートに-s のパターンを示しておくことで、必要に応じて生徒に参考にさせることができる。</p> <p>○ALTの紹介文例を参考にさせることで、紹介文を書く上でのポイント（動詞の用法など）を押さえることができる。</p> <p>○発展的な課題を準備し、習得度に応じてチャレンジさせる機会を設けることで、個々に応じた達成感を味わわせることができる。</p> <p>○相手の綴りとの照合により、自分の綴りを確認させ、間違いに気づかせたり理解を深めさせたりする。</p>	<p>生徒 A,C：動詞のパターンを個別に確認する。例文を参考に一文と一緒に考える。</p> <p>生徒 B: 全体への指示だけでは、指示が理解できないことがあるため、個別にもう一度説明する。</p> <p>生徒 A,C：個別にワークシートの例文についての説明を再度行う。2文一緒に考える。</p> <p>生徒B:黒板またはワークシートに示している一般動詞の用法のパターンに注目させ、空所に入る単語を考えさせる。</p>	<p>○三単現の肯定文・否定文を意欲的に書こうとしている。 〔観察〕</p> <p>○三単現の肯定文・否定文を正確に書くことができる。 〔ワークシート〕</p>

(3) 板書計画

October 31st Thursday Sunny

ちびまる子ちゃんの紹介文を書こう。

①Audrey先生の自己紹介
(Listen & Write)

②まるちゃんの紹介文
(Let's Write)

③Pair Work

ワークシート A

○のとき
-s形 -es形

-ies形 has

×のとき
否定文
She doesn't eat natto.
原形

ワークシート B

(4) ワークシート…p. 18、19参照

(5) 学習環境の工夫

- ・ペアやグループで教え合う活動ができるよう、座席の配置を工夫する。
- ・授業への集中の妨げにならないよう、掲示物は可能な限り背面に掲示する。
- ・学習用具の忘れ物は授業開始前までに申し出るようにさせ、忘れた生徒には授業開始までに必要なプリント等を渡すようにする。

Audrey's Introduction!

Answer

Audrey 先生の情報

①. like Japanese *mikan*

×

②. watch Japanese movie

×

③. have a smartphone

×

Let's Try!

This is Audrey.

①. She likes Japanese *mikan*.

②. She _____ Japanese movie.

③. She _____ a smartphone.

Let's Check!

日本語	原形	-s 形	日本語	原形	-es 形
来る	come	comes	行く	go	goes
料理する	cook	cooks	触る	touch	touches
食べる	eat	eats	洗う	wash	washes
好き	like	likes	見る	watch	watches
作る	make	makes	持っている	have	has
読む	read	reads	日本語	原形	-ies 形
持って行く	take	takes	勉強する	study	studies
書く	write	writes	試す	try	tries

Chibi Maruko-chan's Introduction!

Answer

ちびまる子ちゃんの情報

①. have a sister	○	×
②. eat hamburgers	○	×
eat tomatoes	○	×
③. read <i>manga</i>	○	×
④. study <i>kanji</i>	○	×
⑤. study every day	○	×
⑥. watch TV with her grandfather	○	×
⑦. go to school	○	×

Let's Try!

This is Chibi Maruko-chan.

- ①. _____ a sister.
- ②. She _____ hamburgers, but she _____ tomatoes.
- ③. She _____.
- ④. _____ *kanji*.
- ⑤. _____.
- ⑥. _____.
- ⑦. _____.

Let's Challenge!

☆上の情報以外であなたが知っている情報をもとにちびまる子ちゃんを紹介してみよう。

- ⑧. _____.
- ⑨. _____.
- ⑩. _____.



3 実践・整理

(1) 「要件」を取り入れた授業の実際及び授業研究会等での意見

① 導入における授業の実際及び授業研究会等での意見

<導入における授業の実際（学習活動、指導上の留意点）>

過程	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
導 入 7 分	<ul style="list-style-type: none"> ○ あいさつをする。 ○ 今月の歌を歌う。 ○ 本時の学習活動を確かめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 日付・曜日・天気・時間の確認をする。日付・曜日については綴りを確認する。 ○ 特にスピードが速いところや、発音しにくいところを音読してから歌う。 ○ 本時の学習活動を板書する。 (★3-④)

<分かりやすい授業の要件と意見>

★ 「本時の学習活動を板書する (★3-④)」について

- ・ 「今日の課題や作業の進め方を板書で示す」という「要件」については、右写真のように示しました。



生徒へのアンケート調査の意見から	授業参観者の意見から	授業者の意見から
<ul style="list-style-type: none"> ・ 黒板にこれからすることを順番に書いてあるので分かりやすい。 ・ メニューが書いてあるので分かりやすい 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 全体の授業の流れを視覚的に示すことで、見通しを持たせることができていた 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業全体の流れを板書せずに授業すると、生徒から「今日は何を勉強しますか」と質問する生徒がいた。全体の流れを示すことの大切さを実感した

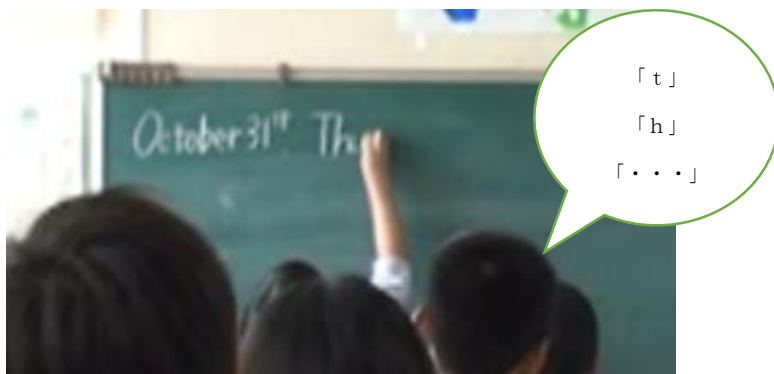
<導入における授業の実際（特別支援教育の視点、個別の教育的支援、評価規準・評価方法）>

特別支援教育の視点	個別の教育的支援	○評価規準 ☆評価方法
<ul style="list-style-type: none"> ○ 導入のルーティン化を図ることにより、安心して学習に入らせ、学習の構えをつくらせることができる。 ○ 学習活動を示すことで、見通しをもたせることができる。 ○ 視覚的に示すことで、学習活動を生徒自身に確認させることができる。 	<p>生徒A:歌詞を見ながら、曲のスピードについていけないことが予想されるため、個別に歌詞を指差して知らせる。</p>	

<「要件」以外の工夫と意見>

★ 「読む、書く、聞く、話す等など多感覚を活用した活動」について

- ・ 日付・曜日については、右写真のように、生徒が発音するアルファベット（綴り）に合わせて教師が板書しました。



生徒へのアンケート調査の意見から	授業参観者の意見から	授業者の意見から
<ul style="list-style-type: none"> ・ 特になし 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 発音だけでなく、綴りまで生徒に確認しているのが良かった 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 特になし

★ 「導入のルーティン化」について

- ・ 授業の導入で、英語の歌を歌う活動を毎時間取り入れるというルーティン化を図ることで、生徒が学習への構えをつくりやすいようにしました。



生徒へのアンケート調査の意見から	授業参観者の意見から	授業者の意見から
<ul style="list-style-type: none"> ・ 勉強ばかりでなく、歌が楽しい ・ 歌詞に出てくる単語を覚えやすい 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 大きな声で歌っている生徒にポイントを与えるなど、意欲を高めている 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 特になし

② 展開における実際及び考察

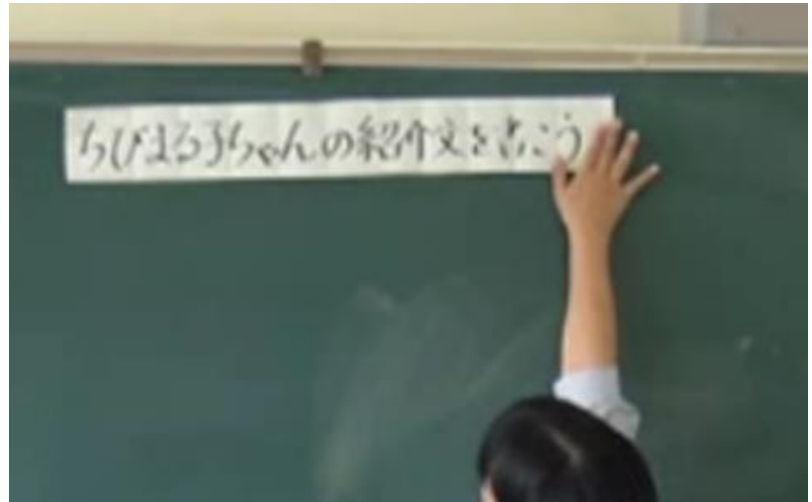
＜展開（本時の目標を設定する）における授業の実際（学習活動、指導上の留意点）＞

過程	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
展開	○ 本時の目標を設定する。	○ 本時の目標を板書する。 (★3-③)
33分	ちびまる子ちゃんの紹介文を書こう。	

＜「要件」と意見＞

★ 「本時の目標を板書する(★3-③)」について

- ・ 「授業の始めに、学習内容（ねらい）について伝え、板書する」という「要件」については、右写真のように示しました。



生徒へのアンケート調査の意見から	授業参観者の意見から	授業者の意見から
・ 特になし	・ 生徒に本時の目標を明確に知らせていたことが良かった	・ 特になし

<展開における授業の実際（特別支援教育の視点、個別の教育的支援、評価規準・評価方法）>

特別支援教育の視点	個別の教育的支援	○評価規準 ☆評価方法
○ 目標を示すことで本時の学習到達内容を把握させることができる。		

<「要件」以外の工夫と意見>

★ 「本時の目標を達成させるために、生徒が興味関心を持ちやすく、よく知っているキャラクターを題材にする」について

- ・ 「第三者の紹介文を意欲的に書くことができる。」「三単現の肯定文及び否定文を正確に正しく書くことができる。」という、本時の目標を達成させるために、生徒が良く知っているアニメキャラクターを題材とし、生徒に、「アニメキャラクター（第三者）の紹介文を書こう」という目標を提示しました。



ALTがキャラクターに変装して登場することで、生徒が興味関心を持って取り組むことができるようにしました。

生徒へのアンケート調査の意見から	授業参観者の意見から	授業者の意見から
<ul style="list-style-type: none"> ・ アニメキャラクターの自己紹介が楽しかった 	<ul style="list-style-type: none"> ・ アニメキャラクターのように生徒が良く知っているものを題材に取り上げることで、学習に対する意欲が高まったり、アニメキャラクターに関する背景知識を活用したりできる。また、ワークシートの「あなたが知っている情報をもとにアニメキャラクターを紹介しよう」の発展課題にも取り組みやすくなる 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 前単元において、三人称単数の概念を理解させるために、導入時に有名なサッカー選手や、アイドル歌手グループのメンバーの一人とそのメンバー全員の写真を使って学習を行ったことが、自分と相手と相手以外といった理解を促すことに有効であった。そこで今回は、生徒が良く知っているアニメキャラクターを題材に取り上げた

<展開（ALTの短い自己紹介を聞く）における授業の実際（学習活動、指導上の留意点）>

過程	学習活動	指導上の留意点
展開	○ ALTの短い自己紹介を聞く。	○ ワークシートの拡大版を黒板に掲示し、活動の方法を説明する。 (★4-⑥、★6-①)
33分		○ ワークシートには三単現の-sのパターンが偏らないように、3種類の一般動詞を使った文を取り上げる。 ○ ALTは、2度、自己紹介する。 ○ その後2つの項目の正しい方に「○」をつけるよう指示する。 (★3-⑩)

<「要件」と意見>

☆ 「ワークシートの拡大版を黒板に掲示し、活動の方法を説明する（★4-⑥、★6-①）」について

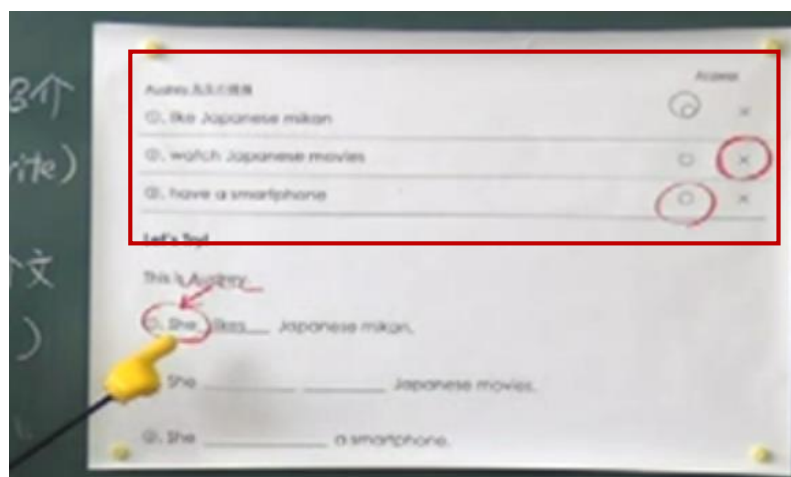
- ・ 「ワークシートと対応させた板書を行う」「言葉の指示だけでなく視覚的な手掛かりも与える」という「要件」については、右写真のようにワークシートの拡大版を黒板に掲示し、視覚的に示しながら説明しました。



生徒へのアンケート調査の意見から	授業参観者の意見から	授業者の意見から
・ 自分のプリントと同じ紙の大きいものを黒板に貼ってくれていたのので、どこにどんなことを書けばよいのか一目で分かった	・ ワークシートの拡大用紙に記入することで、聞き逃しのあった生徒にも分かりやすい ・ 解答が聴覚と視覚の2つの情報で示されて分かりやすい	・ ワークシートの拡大用紙を活用しながら、記入したり説明したりすることで、生徒は自分の間違いを確認しやすいようだった

☆ 『2つの項目の正しい方に「○」をつけるよう指示する（★3-⑩）』について

- ・ 「課題設定を易しいものから難しいものへレベルアップさせ、学習意欲を高める」という「要件」については、右写真のように具体化しました。ALTの2度の自己紹介を聞いて、その答えを「○」「×」という2つの選択肢から選んで回答するという易しい課題からの設定としました。



生徒へのアンケート調査の意見から	授業参観者の意見から	授業者の意見から
・ いきなり紹介文を書くのではなく、「○」「×」をつける簡単どころからだったので分かりやすかった	・ 尋ねられる内容がワークシートに記載されているため、内容を確認しながら聞くことができる	・ ワークシートは、4段階でステップアップができるように設定した。生徒がどこまでできるか楽しみであった

<展開における授業の実際（特別支援教育の視点、個別の教育的支援、評価規準・評価方法）>

特別支援教育の視点	個別の教育的支援	○評価規準 ☆評価方法
<p>○ 拡大して示すことで教師が意図するところに生徒の注意を向けさせやすい。</p> <p>○ 身近なALTのことで取り上げることで、興味を持たせることができる。</p> <p>○ 繰り返し聞かせることで、聞き漏らしを少なくしたり、音の聞き分けをしやすくしたりできる。</p>		

<「要件」以外の工夫と意見>

★ 「拡大して示すことで教師が意図するところに生徒の注意を向けさせる」について

- ・ ワークシートを拡大したものを説明する際には、コントラストがはっきりとした指示棒でポインティングしていくことで、どこを説明しているのかが分かりやすくなりました。



生徒へのアンケート調査の意見から	授業参観者の意見から	授業者の意見から
<ul style="list-style-type: none"> ・ 先生の説明が丁寧で分かりやすい ・ 一つ一つを確認していたのが分かりやすかった 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「見てください」の指示後にポインティングしながら生徒が見ているか確認している 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 特になし

I don't have...

★ 「ALTが繰り返し自己紹介する」について

- ・ 身近なALTの自己紹介を取り上げることで、興味を持たせるとともに、ALTの自己紹介を繰り返し聞かせることで、聞き逃しを少なくしたり、音の聞き分けをしやすくしたりしました。



生徒へのアンケート調査の意見から	授業参観者の意見から	授業者の意見から
<ul style="list-style-type: none"> ・ 繰り返し発音したことで、より頭に入ってきた。ALTがしっかり発音して分かりやすかった 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ALTの自己紹介を繰り返し聞くことで、自分の解答が正しいかセルフチェックでき、生徒は聞き逃した部分を再度確認できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 特になし

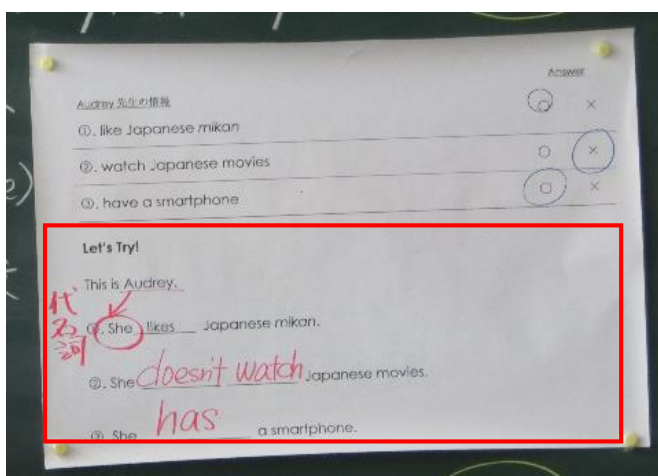
<展開（ALTの紹介文を書く）における授業の実際（学習活動、指導上の留意点）>

過程	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
展開 33分	<ul style="list-style-type: none"> ○ ALTの紹介文を書く。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 一般動詞+-sのパターンの確認 ・ 三単現の否定文の確認 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 主語と一般動詞の形に注目させ、聞き取ったALTの自己紹介を参考に、紹介文の空所に正しい英語を書き入れるよう促す。 (★3-⑩) ○ 既習の一般動詞の-sのパターンを黒板に掲示しておく。 (★3-⑨)

<「要件」と意見>

★ 「紹介文の空所に正しい英語を書き入れる (★3-⑩)」について

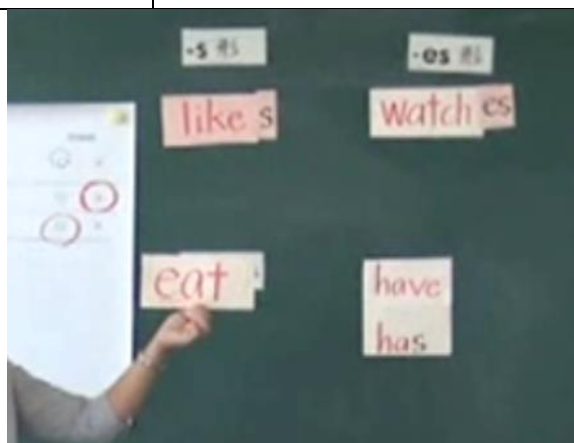
- ・ 「課題設定を易しいものから難しいものへレベルアップさせ、学習意欲を高める」という「要件」については、「ALTの自己紹介を聞いて、『○』『×』で解答する」→「ワークシートの空欄に書いて解答する」というように、難度の高い課題へとレベルアップさせて取り組ませました。



生徒へのアンケート調査の意見から	授業参観者の意見から	授業者の意見から
<ul style="list-style-type: none"> ・ いきなり紹介文を書くのではなく、「○」「×」をつける簡単などころから始めた。自己紹介のワークシートが分かりやすかった 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 既習事項について生徒に確認しながら拡大プリントに記入しており分かりやすい 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 特になし

★ 「既習の一般動詞の-s 形のパターンを黒板に掲示しておく (★3-⑨)」について

- ・ 「授業の途中で、何度か課題の達成状況を確認する」という「要件」については、右写真のように、生徒にパターンを整理して適宜確認させるようにしました。



生徒へのアンケート調査の意見から	授業参観者の意見から	授業者の意見から
<ul style="list-style-type: none"> ・ 黒板に三単現の-s について書いてあったので分かりやすかった 	<ul style="list-style-type: none"> ・ -s パターンの確認で、分類が分かりやすく、同時に発音練習がされていて良かった 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業の中で「分かった」「良かった」と思える生徒が一人でも増えてほしいと考えた

<展開における授業の実際（特別支援教育の視点、個別の教育的支援、評価規準・評価方法）>

特別支援教育の視点	個別の教育的支援	○評価規準 ☆評価方法
○ ポイントの語句のみを書かせることで、書くことが苦手な生徒の負担を減らしたり、考えるべき動詞の用法に注意を向けさせたりすることができる。	生徒 A, C: 動詞のパターンを個別に確認する。例文を参考に一文と一緒に考える。 生徒 B: 全体への指示だけでは、指示が理解できないことがあるため、個別にもう一度説明する。	○ 三単現の肯定文・否定文を意欲的に書こうとしている。 [観察]
○ 黒板やワークシートに-sのパターンを示しておくことで、必要に応じて生徒に参考にさせることができる。		

<「要件」以外の工夫と意見>

★ 「全体説明後、個別に説明のポイントを確認しながら、生徒のつまずきを把握して指導する」について

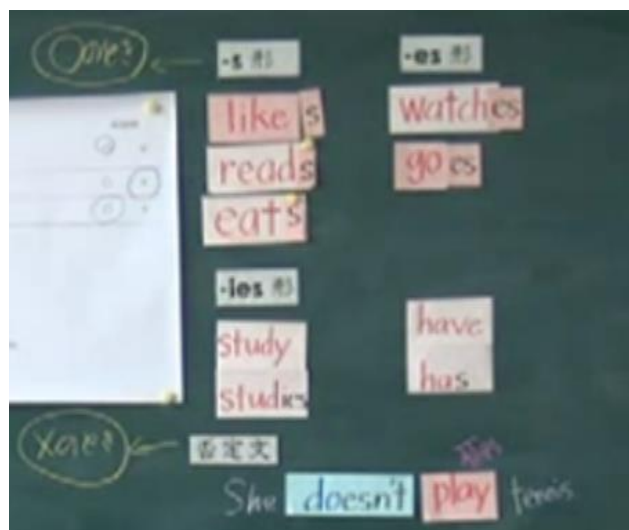
- ・ 全体説明した内容を生徒がどのように理解し、どこにつまずいているのか机間支援をして一人一人を把握しながら指導しました。



生徒へのアンケート調査の意見から	授業参観者の意見から	授業者の意見から
<ul style="list-style-type: none"> ・ 困っているところを教えてもらった ・ 先生がそばに来て声をかけてくれた ・ 先生が細かく教えてくれた 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 机間支援で生徒がつまずいている部分を指導することができている 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ゆっくりとしたペースで学ぶ生徒に対して机間支援で個別に指導した。綴りの間違いはあるが、やり方、考え方が分かった瞬間があったようだ

★ 「机間支援で生徒のつまずきを把握した後、授業のポイントとなる内容をまとめて（分類整理する）全体化する」について

- ・ 「全体説明」→「机間支援（個々のつまずきの把握）」→「全体説明」をすることで、生徒が自分のつまずきに気付いた上でポイントとなる内容を理解させるようにしました。また、理解できている生徒には再確認できるようにしました。



生徒へのアンケート調査の意見から	授業参観者の意見から	授業者の意見から
<ul style="list-style-type: none"> ・ 「○のとき」「×のとき」と板書してあったので分かりやすかった 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 板書をヒントにしてワークシートへ記入できるようになっていた 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 机間支援で個別に指導することで、考え方が分かった瞬間があったようだ

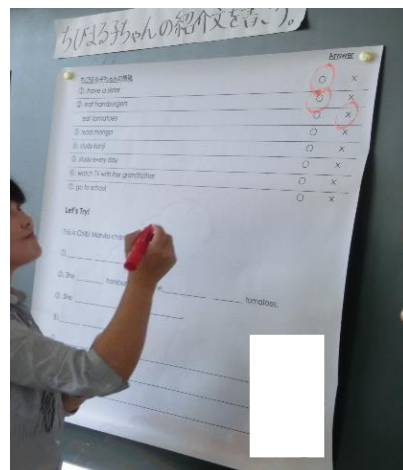
<展開（キャラクターの紹介文を聞き、ワークシートに記入する、ペアで確認し合う）における授業の実際（学習活動、指導上の留意点）>

過程	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
展開 33分	○ キャラクターの紹介を聞き、ワークシートに記入する。また紹介文を書く。	○ ALTの紹介文を参考にしながら、ワークシートの情報をもとに、アニメキャラクターの紹介文を書くように促す。 (★3-⑩)
	○ ペアで確認し合う。	○ 綴りの間違いに注意しながら、ペアで答え合わせをするように促す。 (★8-④)

<「要件」と意見>

★ 「ALTの紹介文を参考にしながら、ワークシートの情報をもとに、アニメキャラクターの紹介文を書くように促す（★3-⑩）」について

- ・ 「課題設定を易しいものから難しいものへレベルアップさせ、学習意欲を高める」という「要件」については、「ALTの自己紹介を聞いて、「○」「×」で解答する課題」→「ワークシートの空欄に書いて解答する課題」へとやや難しいものへ課題をレベルアップさせました。また、その前の学習活動である「ALTの自己紹介」をヒントにして解答できるようにしました。



生徒へのアンケート調査の意見から	授業参観者の意見から	授業者の意見から
<ul style="list-style-type: none"> ・ プリントの1枚目（ALTの自己紹介）が書けたら2枚目（アニメキャラクターの自己紹介）が簡単になった ・ 同じパターンを何度か繰り返して学習できたので分かりやすかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ALTの自己紹介を参考にして、アニメキャラクターの自己紹介を書くことができていた生徒がいた 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒によっては、「3番までできた」、「7番までできた」と喜んでいました。成績が下位の生徒もあきらめることなく取り組み、7番まで書くことができて驚いた

★ 「綴りの間違いに注意しながら、ペアで答え合わせをするように促す（★8-④）」について

- ・ 「自力解決した結果をペアで確認させたり、友達へのアドバイスを伝えたりして、（児童）生徒自身の取組や活動を振り返らせる」という「要件」については、アニメキャラクターの紹介文を書いたワークシートをペアで確認し合う学習活動として取り入れました。



生徒へのアンケート調査の意見から	授業参観者の意見から	授業者の意見から
<ul style="list-style-type: none"> ・ ペア学習が楽しかった 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ペアで確認させる場合には、簡単な問題が良いと考える。教師の板書で確認する方が良い場合もあり、整理が必要である 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 特になし

<展開における授業の実際（特別支援教育の視点、個別の教育的支援、評価規準・評価方法）>

特別支援教育の視点	個別の教育的支援	○評価規準 ☆評価方法
<ul style="list-style-type: none"> ○ A L Tの紹介文例を参考にさせることで、紹介文を書く上でのポイント（動詞の用法など）を押さえることができる。 ○ 発展的な課題を準備し、習得度に応じてチャレンジさせる機会を設けることで、個々に応じた達成感を味わわせることができる。 	<p>生徒 A,C:個別にワークシートの例文についての説明を再度行う。2文一緒に考える。</p> <p>生徒 B:黒板またはワークシートに示している一般動詞の用法のパターンに注目させ、空所に入る単語を考えさせる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 三単現の肯定文・否定文を正確に書くことができる。 [ワークシート]
<ul style="list-style-type: none"> ○ 相手の綴りとの照合により、自分の綴りを確認させ、間違いに気づかせたり理解を深めさせたりする。 		

<「要件」以外の工夫と意見>

★ 「板書にある授業のポイントを個別に説明しながら机間支援する」について

- ・ 生徒が分かったという実感が持てるように、机間支援では、間違いの指摘や解答を教えるという支援ではなく、生徒のつまずきに合った支援を右写真のように、A L Tが板書の内容を活用して行いました。



生徒へのアンケート調査の意見から	授業参観者の意見から	授業者の意見から
<ul style="list-style-type: none"> ・ 先生たちが分からないところを真剣に教えてくれた ・ 分からないところも安心して聞くことができた 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 机間支援の際に、つまずいている生徒には板書を活用して説明できていた。説明されたことを応用・一般化することが難しい生徒には有効である 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 机間支援で個別に指導することで、やり方、考え方が分かった瞬間があったようだ

★ 「個別に肯定的な即時評価を行う」について

- ・ 机間支援の際につまずいている部分とその後の机間支援でできていた場合には、個別に本人だけに分かるような肯定的な評価を右写真のようにジェスチャーで行いました。



生徒へのアンケート調査の意見から	授業参観者の意見から	授業者の意見から
<ul style="list-style-type: none"> ・ 今まで自分の分からないところが分かった 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 特になし 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 特になし

③ まとめにおける実践及び考察

<まとめにおける授業の実際（学習活動、指導上の留意点）>

過程	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
まとめ 10 分	<ul style="list-style-type: none"> ○ 定着診断テストに取り組む。 ○ 本時を振り返る。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 三単現の肯定文・否定文を正確に書けるか確認する。 ○ 自己評価カードの記入により、本時の活動を振り返らせるとともに、次の活動への意欲を喚起する。 <p style="text-align: right;">(★1-⑧)</p>

<「要件」と意見>

★ 「自己評価カードの記入により、本時の活動を振り返らせるとともに、次の活動への意欲を喚起する(★1-⑧)」について

※ 定着診断テストの結果については資料 p. 45～47を参照。

※ 当日は、「まとめ」の時間を10分予定していたが、学習活動の「本時を振り返る」ことに予定の時間が取れなかった。

<まとめにおける授業の実際（特別支援教育の視点、個別の教育的支援、評価規準・評価方法）>

特別支援教育の視点	個別の教育的支援	○評価規準 ☆評価方法

(2) 「要件」を取り入れるためのポイント（留意点）

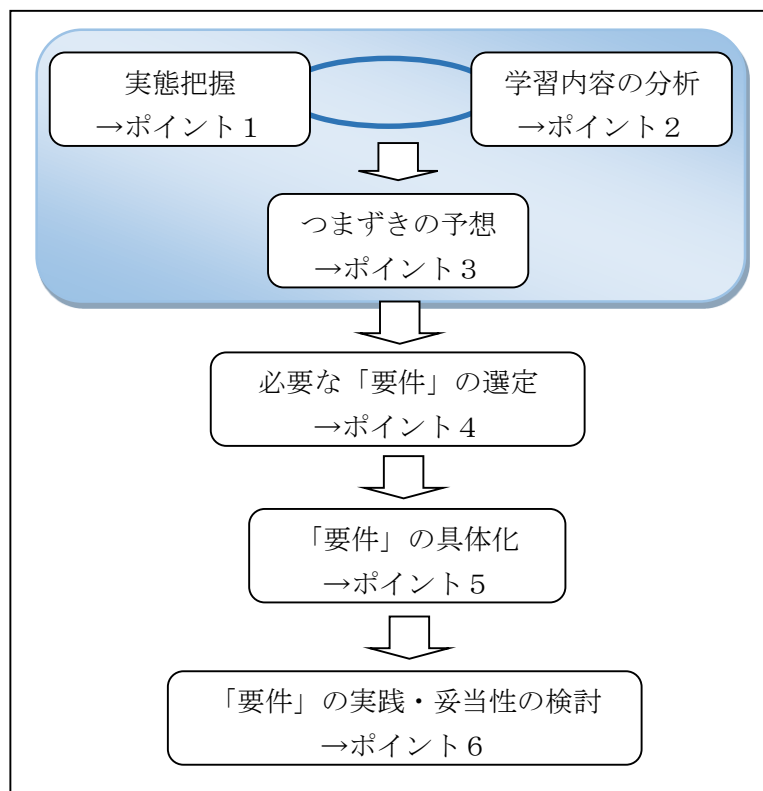
① 「要件」を取り入れるために

「要件」は、授業により多く取り入れると効果が上がるというものではなく、「学級集団」や「個」、また、「学習内容」によって、学習のねらいを達成するために必要な「要件」を検討、選定し、適切に手立てとして具体化しながら取り入れていくことが大切です。

そこで、より必要な「要件」を選定し、適切に実践につなげられるよう「要件」を取り入れるまでの過程を図4として示しました。

実際に授業を考える場合、必要な「要件」の選定に目が行きがちですが、研究を進めて行く中で、そこに至るまでの過程が重要であることが分かりました。必要な「要件」を選定するためには、「実態把握」「学習内容の分析」「つまずきの予想」（図4 ポイント1～3）が重要であり、これらの視点を吟味する過程が不可欠であると考えました。

図4 「要件」を取り入れる過程



② 「要件」を取り入れ、具体化するまでの各過程のポイント

a ポイント1 実態把握

実態把握を行う際は、漠然ととらえるのではなく、視点を定め、可能な限り複数の目で、よりきめ細やかに行うことが、適切な「要件」の選定・具体化へとつながります。

本研究では、「学級集団」「個別の教育的支援が必要な生徒」の二つの側面から行いました。

(a) 主な実態把握の方法

- 担任や教科担当者等による観察
- 集団または個別式による学力・心理検査等
- アンケートや面談等による生徒の「声」

等が考えられます。特に、「個別の教育的支援が必要な生徒」の中には、生徒自身が「こんなふうにしてほしい」等と願っていることがあります。実態把握は、教師の視点からの情報だけでなく、生徒の声を積極的に収集することが大切であると考えます。

(b) 実態把握の視点

○ 学級風土

「分かりやすい授業」に必要な「要件」を授業に取り入れ、生かしていくためには、学級に支持的風土が醸成されていることが必要です。互いの得手、不得手や学び方、学ぶ速さの違い等を認め合い、支え合い、努力を尊重し、共に伸びていこうとする風土があつてこそ、指導・支援は生きてきます。

以下に、学級風土に関する視点の例を示します。

- 生徒同士のかかわり
- 個別の教育的支援が必要な生徒と他の生徒とのかかわり
- 教師と生徒のかかわり 等

○ 学習規律

必要な「要件」を授業に取り入れ、生かしていくために必要なもう一つの条件は、授業において学習規律が守られていることです。もし、この学習規律の定着が不十分であるならば、学級にどのような学習規律が必要か明確にし、互いの学びを尊重するために、それを守っていこうとする風土を醸成することから始める必要があると考えます。

以下に、学習規律に関する視点の例を示します。

- 授業への構え
- 聞き方、話し方
- 発言の仕方、質問の仕方 等

○ 発達上のつまずきの傾向

発達上のつまずきの傾向を把握するためには「学級集団」の場合、集団学力検査や心理検査等により客観的に把握する方法があります。多くの生徒の実態に含まれる共通の項目が「学級集団」の実態（例えば、「聴覚刺激に反応しやすく、集中力がない生徒が多い」として考えられます。

「個別の教育的支援が必要な生徒」の場合、よりきめ細やかな実態把握が求められます。必要に応じて、心理検査で認知特性を把握したり、専門家の意見を参考にしたりして、つまずきの状況を可能な限り正確に把握します。また、つまずきだけでなく、得意な部分や強いところ（例えば、「聴覚情報処理は苦手だが、視覚情報処理は強い」）を把握しておくことも、「要件」を選択する際に有効な情報となります。

以下に、発達上のつまずきの傾向の観点の例を示します。

- 刺激への反応
- 言語による指示理解力
- 言語による表現力
- 作業能力（ノートテイク、ワークシートの管理 等）
- 他者とのかかわり 等

○ 英語の学習状況

英語の学習状況を把握するためには「学級集団」「個別の教育的支援が必要な生徒」とともに、授業時の様子や評価に加え、定期考査等の結果や生徒へのアンケート等が参考になります。

以下に、英語の学習状況の観点の例を示します。

- 英語への興味・関心
- 前単元までの学習内容及び習得状況 等

b ポイント2 学習内容の分析

(a) 学習レディネス

学習内容を分析していくにあたっては、まず、単元を学習するために必要な学習レディネス（前単元までの学習内容の習得状況）を明確にする必要があります。学習レディネスが十分に習得できていないことが把握できれば、その部分への手立てが必要となります。

(b) 学習内容の明確化

次に、小学校における外国語活動と中学校3年間の英語の学習における「これまでの学び」と「これからの学び」を見通した上で学習内容（今、この単元で付けるべき力）の明確化を図ることが必要です。

本研究の授業では、「三単現の肯定文・疑問文・否定文」の理解と運用を目指しましたが、特に「書く」力を付けることを意図した指導を展開しました。

c ポイント3 つまづきの予想

「ポイント1 実態把握」と「ポイント2 学習内容」の分析結果を踏まえ、本単元及び本時における生徒のつまづきを予想します。ここで、生徒がつまづく内容・姿を具体的に想定できるかどうか、次の過程「ポイント4 必要な「要件」の選定」に大きくかかわります。

以下に、つまづきの予想を立てる際のポイントを示します。

- 発達障害等の特性（指示理解の困難、注意集中の困難 等）
- 他教科等におけるつまづきの状況
- 学習内容の理解のつまづき（既習事項の理解が不十分、新たな学習内容の習得が困難 等）
- 学び方のつまづき（学習意欲の低下、学習習慣の未定着 等）

d ポイント4 必要な「要件」の選定

(a) 「要件」の検討

これまでに取り入れていた「要件」がある場合、それらが本単元及び本時の授業に必要なかどうかを再検討し、必要なものを選定します。

以下に、選定すべき「要件」の例を示します。

- 全ての教科、領域に共通して取り入れている「要件」
- 英語において、前単元までに取り入れていた「要件」のうち、本単元においても必要なもの
- 英語において、前時までに取り入れていた「要件」のうち、本時においても必要なもの

(b) 必要な「要件」の選定

本単元及び本時における「ポイント3 予想される生徒のつまづき」に対して必要な「要件」を選定します。

以下に、選定の際の留意点を示します。

- 生徒の学びを支えるものか
- 授業者の負担過重にならないか
- 授業の流れを妨げることにならないか

(c) 新たな「要件」の選定

本研究報告書で明らかにした「要件」が、授業に必要な全ての「要件」というわけではありません。したがって、前述した「(a) 『要件』の検討」「(b) 必要な『要件』の選定」については、1年次の研究で得られた「要件」から選定しますが、必要に応じて新たに「要件」を検討、整理し生かしていくことが大切だと考えます。

(d) 個別の教育的支援が必要な生徒への「要件」

個別の教育的支援が必要な生徒の場合は、実態と「ポイント3 つまづきの予想」をもとに、対象生徒のつまづきを軽減するための「要件」を選定します。その際、個別の指導計画との関連付けを十分に図ることが大切です。

以下に選定すべき「要件」を示します。

- 対象生徒の弱い部分、発達の遅れ等の部分を支えるための「要件」
- 対象生徒の強い部分を生かすための「要件」

e ポイント5 「要件」の具体化

(a) 「要件」の具体化

選定した「要件」をそのまま授業に取り入れるのは、適当でない場合があります。そのような場合には、「要件」を具体化する必要があります。

「要件」の具体化とは、以下のような点に留意して、適切に手立てとして具体化していくことです。

- 学級（対象生徒）の実態
- 学習内容及び学習活動
- 活用する教材
- 授業者の指導に対する考え方（願い） 等

(b) 期待される効果

「要件」を具体化された手立てを取り入れることで、どのような効果が期待できるかを整理します。期待される効果を明確にすることが、「要件」を具体化された手立ての有効性についての適切な評価に結び付きます。

f ポイント6 「要件」の実践・妥当性の検討

実際の授業に取り入れた「要件」については、事前に明確にした「期待される効果」に照らし合わせて、その妥当性がどうであったかを検討することが必要です。「要件」は、必ずしも固定化すべきものではなく、必要に応じて柔軟に取り入れたり、除いたりします。ただし、それらは、ここまで述べてきた過程に則り、慎重に検討すべきであると考えます。

以下に、妥当性の検討をする際の視点の例を示します。

- 学級（対象生徒）の学習時の様子
- 学習内容の習得結果
- 生徒の声（役に立つと感じた手立て） 等

VII 研究の成果と今後の課題

1 研究（2年次）の成果

(1) 「要件」の効果が示唆されたこと

生徒の学習時の様子や学習内容の習得結果、定着診断テストの結果、生徒へのアンケート調査の結果、調査研究協力員の感想等を総合的に見ても、授業に取り入れた「要件」が、多くの生徒の学習意欲を高め、学習内容の理解につながっていたことが窺えます。特に、支援が必要な生徒にとって、つまずきやすい教科である英語において、彼らの授業に対する目の輝きや課題への意欲の持続等、授業参加の質が上がったことを確認できるデータが集積できたことは、「要件」の効果を考察する上で大きな意味を持つと思われます。さらに、「要件」を取り入れた授業を実践したことによって、副次的に新たに必要となる「要件」が明らかになったり、「要件」によっては他の教科への般化の可能性が示唆されたりするものもありました。

これらのことから、「要件」は、どれも一定の効果が期待できることが考えられます。

(2) 「要件」を取り入れる際に留意すべきポイントが明らかになったこと

本研究で提案した「要件」は、優れた授業実践者から見ると、ごく当たり前の「要件」を示したものとして受け取られるかもしれません。しかしこれは、支援が必要な（児童）生徒はもちろん、全ての（児童）生徒を想定し、網羅した「要件」とするため、さらには、複数の教科に共通した「要件」とするための理由で、概括的な表現としています。

それだけに「要件」は、やみくもに取り入れたり、より多くの「要件」を授業に取り込んだりすれば効果が上がるということではありません。本研究を通して、「要件」を授業に取り入れるためには、「生徒（学級）の実態把握」「教材の分析」「（児童）生徒のつまずきの予想」の三点が重要であり、さらにそれらは、教科・単元・学習内容等に必要要件を選定・具体化するためにも不可欠であることを明らかにすることができました。

現在、学校現場にあっては、「分かりやすい授業」づくりのための指導・支援として、板書や指示の出し方の工夫等がスタンダードとされ、広く浸透しつつあります。しかし、「板書はできるだけ構造的に」「指示は短く、明確に」を十分に吟味しないままに、方法を形式的に取り入れることでは「分かりやすい授業」ができたということにはならないと認識しています。

「要件」は、常に目の前の児童生徒や、実施しようとする授業に応じて柔軟に構成し直すことが重要であることを改めて提案したいと思います。

2 今後の課題

(1) 「要件」の精査の必要性

研究の2年次では、研究の1年次で整理した「要件」の効果について、授業実践というフィルターを通した実証的な研究に取り組みました。また、研究対象とする校種・教科・学年等を焦点化することによって、他の校種や教科等にも般化できる成果（「要件」の効果や「要件」を取り入れる際のポイント）を見出すことができました。しかし、研究の1年次で整理した全ての「要件」の妥当性を確かめるには、研究の2年次で行ったような授業実践を通した精査をさらに継続することが大切です。特に、「各教科における特徴的な分かりやすい授業の要件」については、それが本当に特定の教科独自のものと呼べるのか、あるいは他の教科にも共通するものとしてよいのかといった精査を行っていくことが必要と考えます。また、研究協力校における実践の中で、意図的に取り入れた「要件」以外にも、生徒に効果的であった多くの指導・支援の実例例がありましたが、それらを新たな「要件」としてよいものかということについても、今後精査する必要があります。

(2) 「要件」の整理の仕方の見直し

「要件」が、授業改善に役立てられることが何よりの願いです。そのためには、多くの授業実践者が要件に関心を持ち、自分自身の授業設計や授業改善を図る際の視点として活用してもらえるようにすることが必要と考えます。

活用の一例として、「要件」を児童生徒の横断的な実態把握や、効果的な支援を考えるためのツールとして活用することも可能ではないかと感じています。しかし、そのためには、これまでの「要件」の整理の方法を見直す必要があります。具体的には、「チェックリスト機能を付加するための欄を設ける」「各々の『要件』がどのような認知様式に立脚したものであるかを明らかにした上で、その関連が分かるような整理を行う」などの改善が今後の課題になるものと考えます。

引用・参考文献

- ・文部科学省（2008）中学校学習指導要領解説 外国語編
- ・文部科学省（2008）小学校学習指導要領解説 外国語活動編
- ・国立特別支援教育総合研究所（2010）小・中学校等における発達障害のある子どもへの教科教育等の支援に関する研究
- ・長崎県教育委員会（2013）長崎県特別支援教育推進基本計画第2次実施計画
- ・長崎県教育委員会（2013）平成25年度 長崎県学力調査（中学校英語）〈結果報告書〉
- ・埼玉総合教育センター（2012）. 調査研究報告：小中高等学校におけるユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業実践に関する調査研究
- ・埼玉総合教育センター（2013）調査研究報告：小・中・高等学校及び特別支援学校におけるユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業実践に関する調査研究
- ・山形県教育センター（2013）ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりハンドブック
- ・関西国際大学（2012）特別支援教育の考えを取り入れた現場往還型研修による授業力向上プログラム みんなの特別支援教育～授業のユニバーサルデザイン化をめざして～
- ・瀧沢広人（2013）英語授業のユニバーサルデザインつまずきを支援する指導&教材アイデア50. 明治図書
- ・日野奈津子（2012）生徒のやる気がみるみるアップ！英語教師のためのコーチング入門. 明治図書
- ・柘植雅義（2011）通常学級における授業ユニバーサルデザイン：その有効性と限界を巡って. 特別支援教育研究,652,4-6.

資 料

資料1 生徒へのアンケート調査及び定着診断テストの結果

1 調査の方法

(1) 調査の対象

調査研究協力校（A中学校）第1学年4学級の生徒121名

(2) 調査日

平成25年10月31日（研究授業日）

(3) 手続き

生徒へのアンケート調査（以下、「アンケート調査」と記す）は、当教育センターで作成し、定着診断テストの作成は研究協力員に依頼した。対象学級の選定は、研究協力員に一任し、研究授業終了直後に対象学級の生徒全員にアンケート調査と定着診断テストを実施した。アンケート調査と定着診断テストの配付と回収及び採点は研究協力員に依頼した。

(4) 調査内容

アンケート調査は、**資料2**（p. 49参照）に示すとおりである。アンケート調査の内容は、「1 生徒の英語に対する意識」を把握するための質問を3項目設定し、「2 生徒にとって有効であった手立て」を把握するための質問を2項目設定した。

回答は、「1 生徒の英語に対する意識」を把握する質問項目については、4件法（4つの選択肢で回答を得る方法）及び自由記述とした。また、「2 生徒にとって有効であった手立て」を把握するための質問項目は、多肢選択式及び自由記述とした。

定着診断テストは、**資料3**（p. 50参照）に示すとおりである。全3問で構成され、主語が三人称単数で、現在形の肯定文に書き換える問題が2問、同じく否定文に書き換える問題が1問で設定された。

(5) 分析方法

質問項目ごとに、欠損値を除いて集計・分析した。なお、各項目によって欠損値の数が異なるため、パーセントなどの数値は項目ごとの有効データ数により算出した。自由記述については、「今日の授業は楽しかったですか」「今日の授業は分かりやすかったですか」という各質問に対する理由ごとに類似する記述をまとめ、カテゴリー化した。定着診断テストは、各問に関する誤答の内容を分析した。

2 生徒へのアンケート調査の結果

(1) 「問 英語の授業は好きですか」について

結果を図1に示した（有効回答数n=121）。英語の授業が「好き」「やや好き」と回答した生徒の割合は88%であった。英語の授業が「あまり好きではない」「好きではない」と回答した生徒の割合は12%であり、大半の生徒が英語が「好き」「やや好き」との回答をしていた。

(2) 「問 今日の英語の授業は楽しかったですか」について

結果を図2に示した（有効回答数n=121）。研究授業当日の英語の授業が、「楽しい」「やや楽しい」と回答した生徒の割合は96%と大半を占め、「あまり楽しくない」と回答した生徒の割合は3%、「楽しくない」と答えた生徒はいなかった。

また、表1に「楽しい」「やや楽しい」と回答した生徒が記述した理由を示した。「教師の変装」、「教師の言動」、「いつもと違う」といった現象に対して楽しいと感じた生徒が多かった。

次に「分かりやすかった」「全部解けた」など、授業の内容が理解できたことや「授業の展開」、「書く活動」、「教材」など、授業の内容に関することに対して楽しいと感じている生徒が多かった。

なお、少数ではあるが、「困ったときの対応」「称賛」など、「支持的な雰囲気」に対して楽しいと感じている生徒がいた。

一方、「あまり楽しくなかった」と回答した生徒は4名で、理由として「分からないところがテストだった」「書くことばかりだった」「今日は見学に来ている先生がいて緊張した」と記述していた。1名は未記入であった。

図1 「問 英語の授業は好きですか」

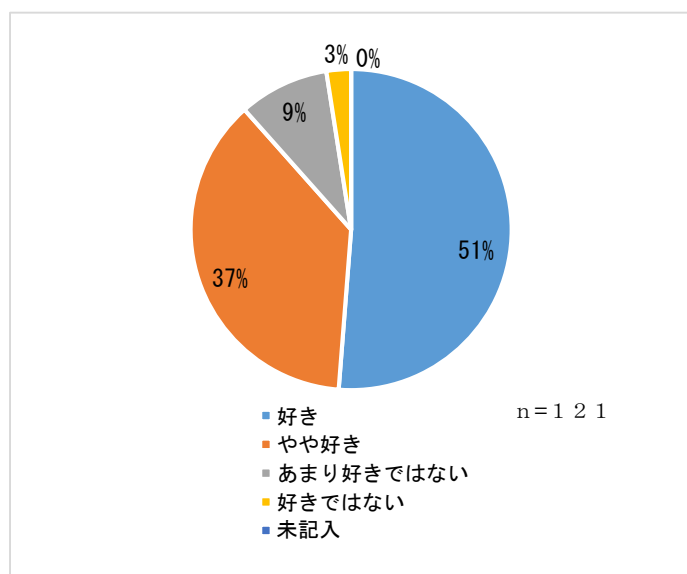


図2 「問 今日の英語の授業は楽しかったですか」

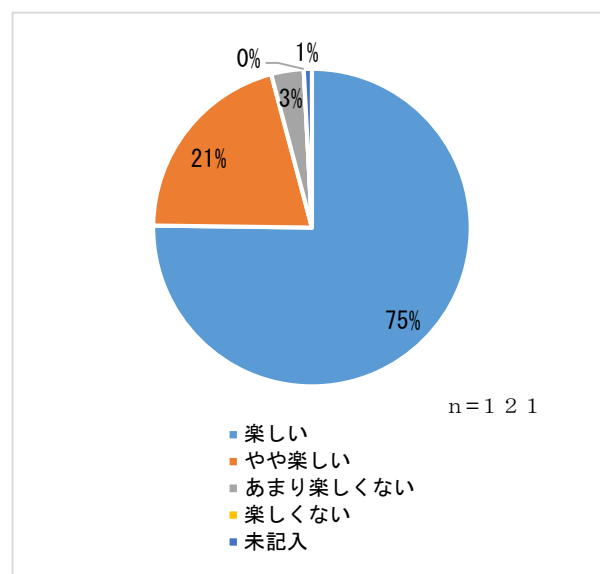


表1 「問 今日の英語の授業は楽しかったですか」の理由の記述内容

()の数字は、自由記述の延べ人数

カテゴリー	自由記述内容	
教師の変装	<ul style="list-style-type: none"> ・アニメキャラクターができた(22) ・アニメキャラクターが盛り上げてくれた(2) ・アニメキャラクターの自己紹介が楽しかった(1) ・アニメキャラクターがかわいかった(1) ・イベントっぽかった(先生がアニメキャラクターのコスプレをしていた)(14) 	計40名
理解できた喜び	<ul style="list-style-type: none"> ・分かりやすかった(6) ・分からなかったところも分かった(1) ・よく分かった(2) ・全部とけた(2) ・問題がすぐ分かった(1) ・ちょっと単語が書けるようになった(1) ・分からなかったけど、できたときうれしかった(1) ・自己紹介で分かりやすく否定文が書けた(1) ・否定文のときは、動詞は原形にするなど分かった(1) ・自己紹介が改めて分かった(1) ・楽しいまではいかないけど、すぐに問題が解けた(1) 	計18名
いつもと違う	<ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな人がきた(1) ・いつもより考えることが多かった(1) ・いつもの授業と少し違った授業だった(7) ・いつもよりクイズや質問が多かった(2) ・いつものように英語を言わない(1) 	計12名
教師の言動	<ul style="list-style-type: none"> ・ALTがおもしろかった(3) ・オードリーののりがいい(3) ・おもしろいことを言ってくれた(1) ・小杉先生がしけたところ(1) ・だじゃれがあった(2) 	計10名
授業の展開	<ul style="list-style-type: none"> ・歌をうたう(2) ・難しいばかりではなく、分かりやすかったし楽しくできた(1) ・いろいろな物を使ったので、分かりやすく楽しかった(1) ・アニメキャラクターの紹介文がたのしい(1) ・アニメキャラクターやALTの知らないところを知った(3) 	計8名
書く	<ul style="list-style-type: none"> ・自分で書くところ(1) ・紹介文を書く(5) ・書くテスト(1) ・単語を書くこと(1) 	計8名
困ったときの対応	<ul style="list-style-type: none"> ・分からないところがあったら聞いてくれる(1) 	1名
称賛	<ul style="list-style-type: none"> ・Goodと言われた(1) 	1名
プリントの分かりやすさ	<ul style="list-style-type: none"> ・プリントだけで、覚えられたような気がする(1) 	1名

(3) 「問 今日の英語の授業は分かりやすかったですか」について

結果を図3に示した（有効回答数n=117）。本時の授業が、「分かった」「やや分かった」と回答した生徒の割合は94%、「あまり分からなかった」と回答した生徒の割合は3%、「分からなかった」と回答した生徒はいなかった。

12%の生徒が英語の授業が「あまり好きではない」「好きではない」と回答しているが、今日の授業が「あまり楽しくない」と回答した生徒が3%、今日の授業は「あまり分からなかった」と回答している生徒が3%であり、研究授業当日の授業は生徒にとって、概ね「楽しい」「分かった」と感じるものになっていた。

また、表2に「分かった」「やや分かった」と回答した生徒が記述した理由を示した。「プリントの分かりやすさ」や「繰り返しの学習」「説明の分かりやすさ」により、分かりやすいと感じた生徒が多かった。

一方、「やや分かった」と回答している生徒の中でも、「-sなどが、ちょっと分かりにくかった」「ちょっと分からなかった」「ちょっと難しいものがあった」「アニメキャラクターの印象が強くて少し授業が入らなかった」との記述があった。「あまり分からなかった」と回答した生徒は3名で、理由として「何か分からなかった」「英語が苦手だから」と記述していた。1名は未記入であった。

図3 「問 今日の授業は分かりやすかったですか」

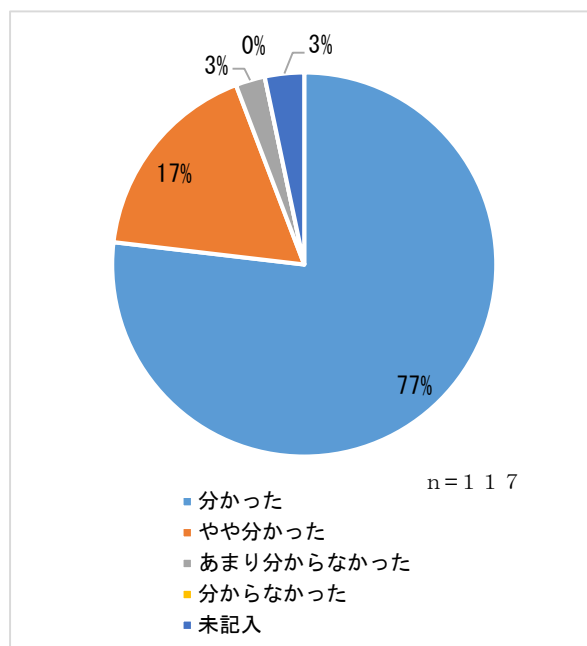


表2 「問 今日の英語の授業は分かりやすかったですか」の理由の記述内容

()の数字は、自由記述の延べ人数

カテゴリー	自由記述内容	
復習機会／繰り返し学習	<ul style="list-style-type: none"> ・三単現の-Sの復習をしたから、しっかりと頭の中で確認できた(6) ・三単現の-Sの説明が分かりやすい(1) ・繰り返し復習(9) ・否定文の復習ができた(1) ・同じパターンを何回も繰り返しやった(1) 	計18名
プリントの分かりやすさ	<ul style="list-style-type: none"> ・プリントを使った(9) ・最初のプリントで注意しなければいけないところがあって、問題が解きやすかった(1) ・プリントの1枚が書けたら、2枚目が簡単になった(1) ・自己紹介の紙がすごく分かりやすい(1) ・いきなり紹介文を書くのではなく、O×をつける簡単なことから始めた(1) ・プリントに分かりやすく書いてあった(1) ・プリントに三人称単数の表があった(2) ・虫食いに解答を挿入することしかなかったから(1) 	計17名
説明の分かりやすさ	<ul style="list-style-type: none"> ・指導や説明が丁寧、分かりやすい(9) ・三人称単数は苦手だけど、「she」「he」と「it」の時に、「-s」をつけるのが分かった(3) ・1つ1つ文を確認した(1) ・授業中にヒントや説明があった(1) 	計14名
板書	<ul style="list-style-type: none"> ・先生も黒板で大きいプリントと一緒にやってくださったので分かりやすかった(3) ・黒板に詳しく分かりやすく書いてあった(3) ・黒板に英文法や例文と一緒にまとめて書いてある(1) ・黒板に三単現の-Sについて書いてあった、貼ってあった(1) 	計8名
発音	<ul style="list-style-type: none"> ・自己紹介が聞き取れた(1) ・ALTがしっかり発音した(1) ・先生達の発音が良かった(1) ・繰り返し発音したことで、より頭に内容が入ってきて、1時間だけなのに、いろんなメニューをした(1) ・発音を何回も確かめたりして、意味も分かったし、書き方も分かった(1) ・繰り返し発音したことで、より頭に内容が入ってきて、1時間だけなのに、いろんなメニューをした(1) ・発音を何回も確かめたりして、意味も分かったし、書き方も分かった(1) 	計7名
授業自体の楽しさ	<ul style="list-style-type: none"> ・楽しいからどんどん頭に入ってきた(5) 	計5名
授業の展開	<ul style="list-style-type: none"> ・みんなが終わってから次へ進むペース(3) ・次に何をするのか、今何をやっているのか分かる(1) ・(プリントを使って)ゆっくりと説明してくれた(1) 	計5名
困り感への対応	<ul style="list-style-type: none"> ・困っているところを教えてもらった(1) ・先生達に教えてもらい分かった(1) ・先生方が細かく教えてくれた(1) 	計3名
被受容感	<ul style="list-style-type: none"> ・先生達が優しく教えてくれた(1) ・先生がそばにきて声かけをしてくれた(1) ・先生達が分からないところを真剣に教えてくれた(1) 	計3名
理解できた喜び	<ul style="list-style-type: none"> ・Sheとかの使い方が分からなかったけど、今日の授業で分かった(1) ・今まで自分の分からなかった部分が分かった(1) 	計2名
興味・関心	<ul style="list-style-type: none"> ・クイズ形式で楽しみながら学習できた(1) ・英語で言っても、手でサインみたいにしてた(1) ・アニメキャラクターを使った解説(1) 	計3名

(4) 生徒にとって有効だった手立て

アニメキャラクターの紹介文を書くために有効だった手立てについて、**図4**に示した（有効回答数 n=121 複数回答可）。「練習問題の動詞のチェック表」と回答した生徒の割合が69%と最も高く、「友達との答え合わせ」が低かった。その他の項目においては、どれも60%で、差異はなかった。

図4 紹介文を書くときに役に立ったもの

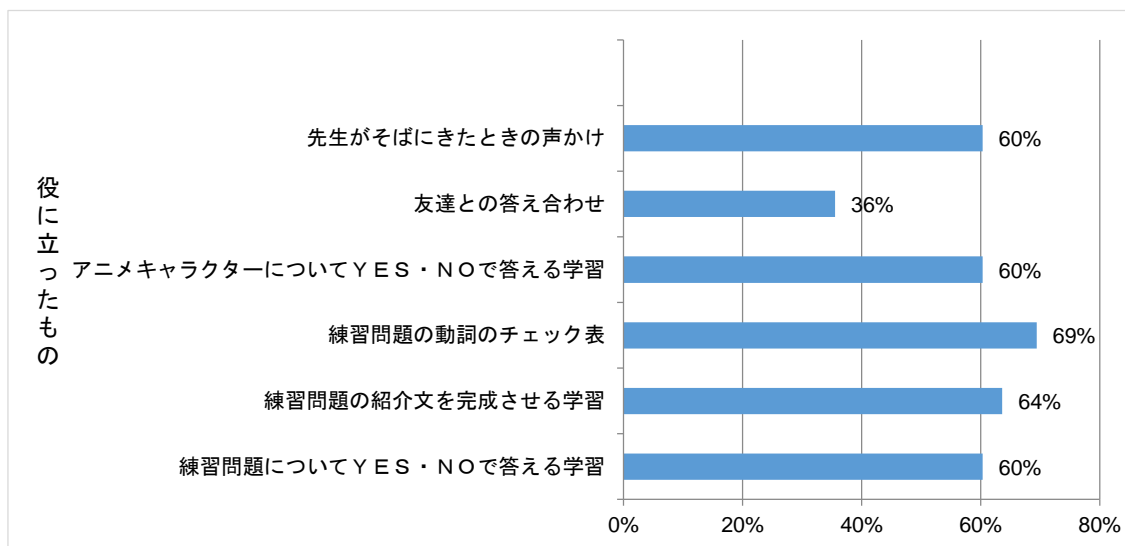
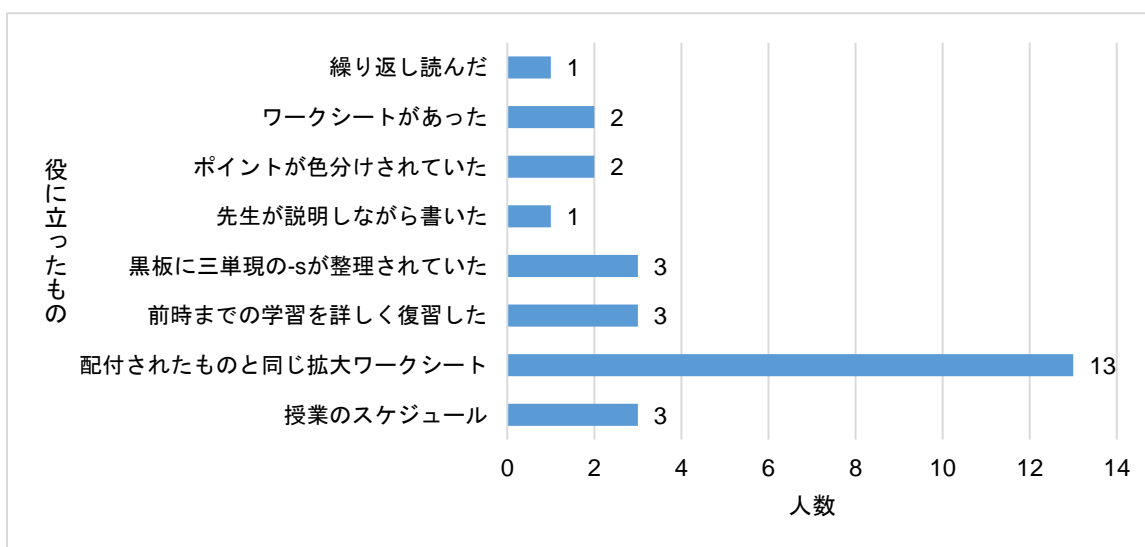


図4の教師が意図して設定した手立て以外で、生徒が紹介文を書くときに役に立ったものについて**図5**に示した（有効回答数 n=28）。その中で、13名の生徒が、配付されたワークシートと同じものを拡大し、それを使って説明があったことが役に立った。その他に7項目の手立てが挙げられているが、どれも2名前後で差異はなかった。

図5 教師が意図して設定した手立て以外に役に立ったもの



3 定着診断テストの結果

(1) 生徒へのアンケート調査の結果との関連から

「定着診断テスト全3問：問題①～③」（以下「定着診断テスト」と記す）の正答数の割合を図6に示した。定着診断テストは、121名全員の解答を得ることができた。54人（44％）の生徒が全問正解で、41人（34％）の生徒が正答数2問と、77％の生徒が定着診断テストに関しては正答数が誤答数を上回った結果となった。

言い換えると、22％の生徒が正答数1問以下で、定着診断テストで正答数が誤答数を下回る結果となった。

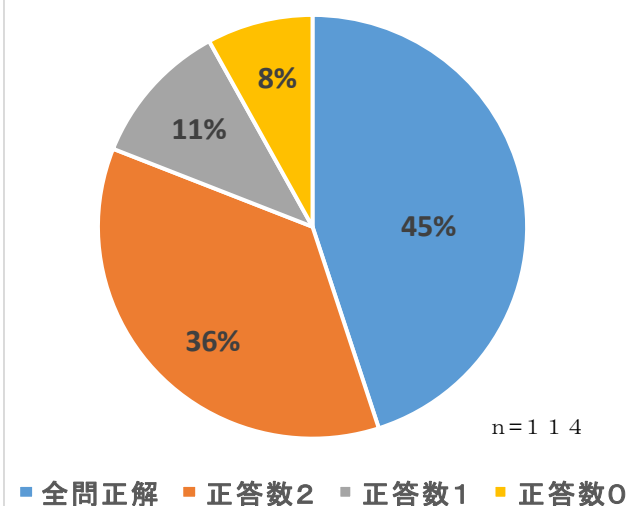
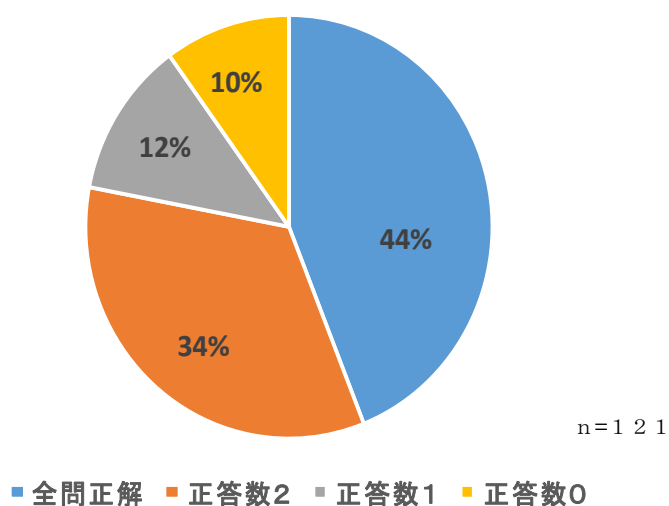
「問 今日授業は分かりやすかったですか」に回答した生徒は117名であり、そのうち「分かった」「やや分かった」と回答した生徒114名の定着診断テストの正答数の割合について図7に示した。「分かった」「やや分かった」と回答した生徒のうち81％の生徒が定着診断テストでの正答数が2問以上であった。

しかし、19％の生徒が「分かった」「やや分かった」と回答しているものの、定着診断テストでは、正答数が1問以下であり、意識と定着診断テストの結果にずれがある生徒がいた。誤答の内容にはばらつきがあり、無回答が目立った。

一方、「あまり分からなかった」と回答した生徒は117名中3名で、正答数0問が1名、正答数1問が1名、全問正解が1名であった。「分からなかった」と回答した生徒は0名であった。

図6 定着診断テストの正答数の割合

図7 「分かった」「やや分かった」と回答した生徒の定着診断テストの正答数の割合



(2) 定着診断テストの各問題の分析

定着診断テストは、対象生徒121名全員の結果を得ることができた。誤答の内容を表3に示し、定着診断テストの各問題に正答した生徒数の割合と誤答した生徒数の割合を内容別に図8～図10に示した。

各問題に正答した生徒数の割合は50%以上であり、半数以上の生徒が、本時の授業を理解し、本時の目標が達成できている。特に、問題②は、正答率が87%であり、haveをhasに変えることは理解しやすいことが分かった。誤答の内容で目立ったのが、問題①の動詞の-s」と、問題③の「否定文における動詞の原形」であった。

表3 誤答の内容及び誤答の理由

誤答の分析	理由
動詞の-s	問題①で、goをgoesにしていない 問題②で、haveをhasにしていない
文法	主語が2個ある 主語や動詞の順番が違う
スペル	goesをgesやstudyをstudeyと書くなど、スペルが違う
動詞の原形	問題③で、doesn'tの後をstudyに変えず、studiesと書いている

図8 問題① They go to the park. (下線部をKenにかえて) の正答と誤答の割合と内容

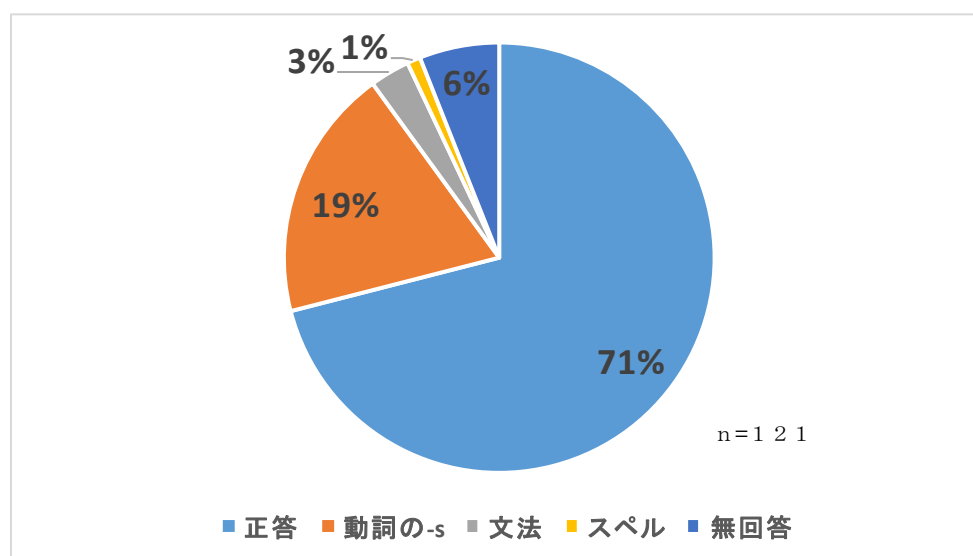


図9 問題② I have two cats. (下線部 I を She にかえて) の正答と誤答の割合と内容

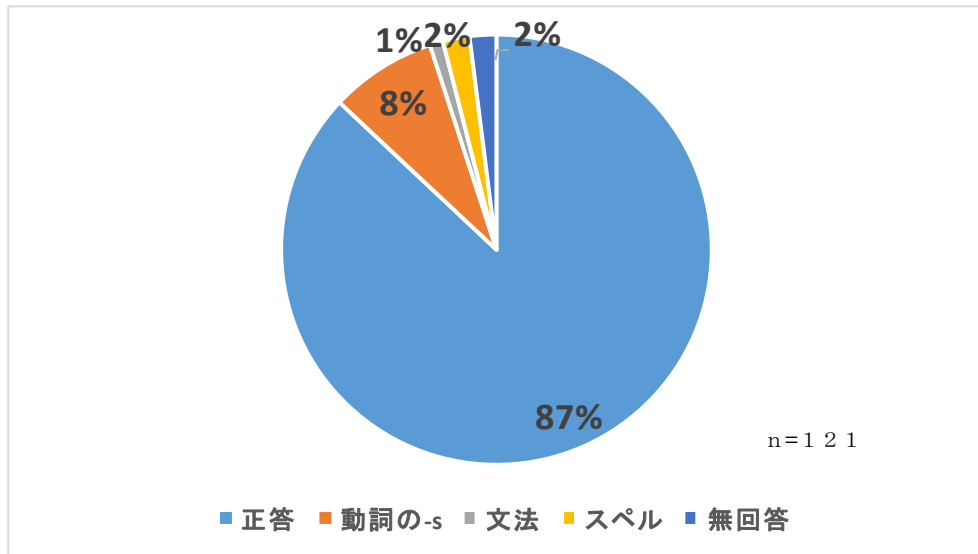
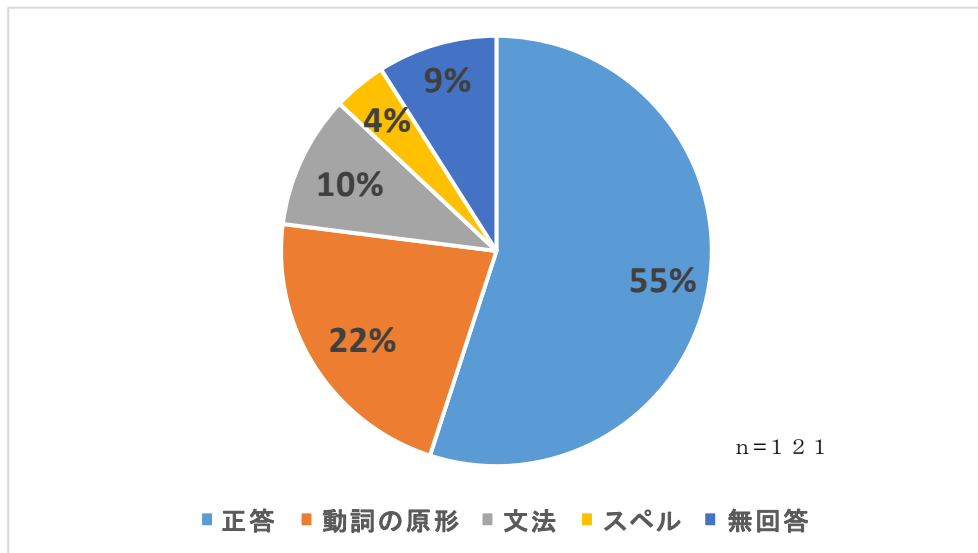


図10 問題③ Niki studies Japanese on Sunday. (「～しません」という否定文に) の正答と誤答の割合と内容



4 考察

調査の対象とした学級については、88%の生徒は英語が「好き」「やや好き」と回答しており、多くの生徒が英語に対して好印象を持っていることが窺えた。本時の授業についても、9割以上の生徒が「楽しい」「分かりやすかった」と感じており、本時の授業に対して積極的な態度で参加できていたと判断できた。そこで、その「楽しさ」や「分かりやすさ」が、何によるものか自由記述をカテゴリー化したものから考察する。

「楽しさ」の要因（表1参照）では、「教師の変装」「教師の言動」「いつもと違う」といった現象面に対して楽しいと感じた生徒が多かった。しかし、「理解できた喜び」を「楽しさ」の要因に挙げている生徒も一定数いた。これは、生徒は、単にALTの変装やALTとのチーム・ティーチングの授業であったことだけを捉え、授業を楽しんでいるのではなく、理解できたことや問題を解けたことから、授業の楽しさを実感していると推察できる。

一方、「分かりやすさ」の要因（表2参照）では、一回の授業の中で、反復して学習する機会があることや教師の説明が丁寧で分かりやすいなど、指導方法の工夫に関する記述が多く見られた。同様に、ワークシートや板書といった教材・教具の工夫を挙げている生徒も多かった。生徒に有効だった手立てを見ても、紹介文を書くときに役に立ったもの（図4参照）として、6割の生徒が練習問題として行ったワークシートや動詞のチェック表を支持していることから、紹介文を書く上でのポイントを学習できる機会があり、発展的な課題に既習内容を参考にしながら習熟度に応じてチャレンジできるような手立てが有効であったと考えられる。さらに、配付されたものと同じワークシートが黒板に拡大して貼られたことが役に立ったという回答が目立つ（図5参照）ことから、このような工夫は、「どこを説明されているか分からず、板書をノートやワークシートに書き写すことが難しい」「注意を持続することが難しく、聞き逃しがある」生徒が、板書と手元のワークシートの照会がしやすくなることや聞き逃しがあっても情報が残っていることが、授業の分かりやすさにつながると推察される。

しかしながら、本授業の課題としては、「分かった」「やや分かった」と回答した生徒は合わせて94%だったものの、そのうち19%の生徒には、定着診断テストで正答数が1問以下であり、意識と授業内容の理解には、ずれが生じている生徒がいることである。

生徒の自由記述（表1、表2参照）や定着診断テストの誤答分析（図8～10参照）を見ると、生徒は、「主語が三人称単数現在形の際に動詞に-sを付ける」ということに対する理解は概ねできており、これは、教師が本時の目標としてねらったものと合致したものであり、その手立てが有効であったことを支持している。一方で、「否定文では動詞を原形に戻す」ということに対しては、半数近くが誤答であり、学習したことが定着していないことが考えられた。すなわち、既習した内容を活用できるようにするためには、既習した内容を反復して学習し、定着を図ることの重要性が示唆される。

資料2

授業アンケート

1 (1) ~ (3) の質問を読んで、あてはまるものを1つ選び、○で囲んでください。また、その理由を下の に書いてください。

(1) 英語の授業は好きですか？

好き やや好き あまり好きではない 好きではない

理由

(2) 今日の英語の授業は、楽しかったですか？

楽しい やや楽しい あまり楽しくない 楽しくない

理由

(3) 今日の授業は分かりやすかったですか？

分かった やや分かった あまり分からなかった 分からなかった

理由

2 (1) ~ (2) の質問を読んで、各問に答えてください。

(1) 今日の授業では、みなさんが、ちびまる子ちゃんの紹介文を書くことができるようにするために、①~⑥の工夫をしました。あなたが、役に立ったものの () に○を記入してください。いくつつけてもかまいません。

① Yes・No で答える学習 ()

② オードリーの紹介文を完成させる

学習 ()

③ 動詞の check 表 ()

④ ちびまる子ちゃんについて

Yes・No で答える学習 ()

⑤ 友達との答え合わせ ()

⑥ 先生がそばにきたときの声かけ ()

(2) ①~⑥以外で授業の中で分かりやすい、役に立ったと思うものがあれば書いてください。いくつ書いてもかまいません。

(例) 黒板に動詞の s や es の形が整理してあった

Audrey's Introduction!

Audreyさんの情報

①. like Japanese mikan

②. watch Japanese movie

③. have a smartphone

Let's try!

This is Audrey.

①. she likes Japanese mikan.

②. she _____ Japanese movie.

③. she _____ a smartphone.

Let's Check!

原形	s	es	原形	s	es
来る	come	comes	行く	go	goes
作る	cook	cooks	触る	touch	touches
食べる	eat	eats	洗う	wash	washes
読む	like	likes	見る	watch	watches
作る	make	makes	持つ	have	has
読む	read	reads	勉強する	study	studies
取る	take	takes	書く	write	writes
書く	write	writes	試す	try	tries

Chibi Maruko-chan's Introduction!

ちびまる子ちゃんの情報

①. have a star

②. eat hamburgers

③. eat tomatoes

④. read manga

⑤. study hard

⑥. study every day

⑦. watch TV with her grandmother

⑧. go to school

Let's try!

This is Chibi Maruko-chan.

①. _____ a star.

②. she _____ hamburgers, but she _____ tomatoes.

③. she _____ manga.

④. _____ hard.

⑤. _____ every day.

⑥. _____ with her grandmother.

⑦. _____ to school.

Let's Challenge!

①. _____

②. _____

③. _____

資料3

Class () No. () Name ()

REVIEW TEST

☆つぎの英文を（ ）の指示に従って書きなおしなさい。

- ① **They go to the park.** （下線部を **Ken** にかえて）

- ② **I have two cats.** （下線部 **I** を **She** にかえて）

- ③ **Niki studies Japanese on Sunday.** （「～しません」という否定文に）

おわりに

平成24年度からの2年間「特別支援教育の視点を生かした分かりやすい授業づくり」という研究主題のもと、調査研究に取り組みました。

1年次は、「分かりやすい授業づくり」の要件を整理するために、中学校の5教科に焦点を当て、当課のみならず、義務教育研修課等に所属する先生方の協力を得て、一定の成果としてまとめることができました。

2年次は、中学校の英語に特化し、近隣の中学校1校との協働により「分かりやすい授業づくり」について考察を深めました。

2か年の調査研究の根底にあるもの、それは、当課を中心に、これまで集積してきた支援が必要な児童生徒への適切な指導と必要な支援に関する方法論（ノウハウ）を、発達障害等の特性を有する児童生徒だけでなく、全ての児童生徒たちへ押し広げられないかという願いの発信でもありました。

その背景には、自身の努力がなかなか報われない児童生徒、学業不振に悩み、苦しみ、学習に対する意欲までも失いつつある児童生徒を何とか救い上げたいという思いがありました。

さらには、児童生徒の学力向上が否応なしに求められる学校の実状がある中、低学力の児童生徒への対応ということも、頭をかすめました。

研究主題にある文言、特別支援教育の視点を生かすとありますが、ここでの生かすとは、通常の学級において各教科等の指導を行う際、特別支援教育がこれまで大切にしてきた個への配慮等を意図的に取り込むことによって、授業自体の分かりやすさにつなげていくとともに、児童生徒一人一人の学びを今一度確立させようとすることにほかなりません。

さて、一応の成果として、まとめあげたつもりですが、当然のことながら課題も山積しています。「ユニバーサルデザインによる授業づくり」やそれに類する言葉が広がりつつあるようですが、私どもは、それはあくまで最大公約数的な基礎的環境整備としてとらえています。その上に、何を積み上げていくかが、「分かりやすい授業」等につながっていくと考えていますが、それは、当該の学級や児童生徒の適切且つ入念な実態把握等を基盤として構築されるものでなければならないと思います。

最後になりますが、調査研究協力校として、当方の無理なお願いを何度も快くお引き受けいただいた大村市立大村中学校の校長先生はじめ、関係の先生方、大村市教育委員会に厚く御礼申し上げます。また、決して気付くことができなかった意見等を惜しみなく提供してくださった篠崎所長はじめ、教育センターの指導主事の皆さん方に心から感謝申し上げます。

それぞれの分野における専門家が、思いを一つにして協働することの素晴らしさと大切さを、改めて教えられたような気がします。本当にありがとうございました。

この場をお借りして、改めて感謝の言葉を述べさせていただくとともに、今後とも当課の調査研究に対しまして、忌憚のない御意見等を賜りますことをお願い申し上げ、終わりの言葉といたします。

平成24、25年度 調査研究報告書（2年次報告）

特別支援教育の視点を生かした分かりやすい授業づくり

長崎県教育センター 特別支援教育研修課

〒856-0834 長崎県大村市玖島1丁目24-2

TEL (0957) 53-1130 FAX (0957) 52-9242

